
短編小説集。

水月 灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説集。

【Nコード】

N8591J

【作者名】

水月 灯

【あらすじ】

ふと思ひ浮かんだ短編小説的なものを載せていきます。

異世界トリップ的なものが多いと思われます。もしくは西洋系。時々現代とか。ようはごたまぜです。

連載する予定はありません、一応読み切りばかり。

繋がる扉（トリップ）

それは、ある日の出来事。

夜中にはつちりと目を覚ましたわたしは、喉の渴きを感じて、しょぼしょぼと眠い目を擦りながら、階下へ降りて台所でお水でも飲むと、自室のドアノブに手を掛けた。

欠伸を噛み殺しながらガチャリとドアを開け、一步向こうに踏み出そうとした瞬間、何故か壁にぶち当たった。

……ごちん、ではなく、ぼふっという感じだった。

ほえ、と気の抜けた声を上げてよく見ると、ベッドの小脇に点けた小さなライトの光の中、ぼんやりと浮かび上がっているのは、暗い色の服。

見上げてしまった目には、眠気も一瞬でぶっ飛ぶような精悍な美形のおにーさんが立っていた。

赤みがかった金髪に、青い瞳。がっしりとした身体。明らかに、日本人ではない。そして、全く知らない人だ。

ぽかんと見つめていると、相手も何やら知らない言葉で何事か呟いて、次の瞬間そのちよつと野性的な美貌が近づき――。

「ふぎや ああああああああ！！」

思わずぶん投げてしまったのは条件反射だと思う。だって、生まれてこの方二十二年、そんなことをされた経験はなかったし、幼いころから護身の意味で習っていた柔道はすっかり身についてしまっていたのだから。

まさかそれが、更なる墓穴を掘ることになるなんて。

全く気付いていなかったのだけれど、その時私の部屋のドアは、何故かたまたま、相手の部屋のそれと繋がってしまっていたらしい。で、混乱したまま部屋の外に出た瞬間、ドアは閉まってしまい、向こう側に出たわけで。

投げ飛ばした後、たまたま、相手の部屋を片付けていたらしいメイドさんらしき人たちと目がばっちりあってしまって。

再び開いたドアの向こうはもう、わたしの部屋ではなくて。

——あれよあれよと言う間に、何故かわたしはその相手と結婚することになっていた。

聞けば、地球ではない異世界のその国の王様の二番目の弟であるらしい彼は素晴らしく能力の高い軍人さんらしく、色々あって、周りは彼をさっさと結婚させたかったらしいのだけれど、何でも結婚しなくなかった彼が出した条件が、『自分よりも強い相手』というもので――。

みんな、これ幸いとちゃっちゃか話を進めてしまったわけだ。

いやいやおかしいでしょ。明らかに得体の知らない相手をなんでそんなに簡単に奥さんにしようと思うわけ。

しかも、誰より乗り気だったのは金髪碧眼のその彼だった。

見た目が好みだったから会った瞬間あんなことをしたとか——強制猥褻罪だ！——投げ飛ばされてますます好みだと気付いたとか——

——あんたはマゾか！——散々結婚を渋っていたわたしが聞かされた話は、信じられないようなことばかり。

だって、別にわたしはどこにでもいるような平凡な容姿の女だ。

この間、大学を卒業したはいいいけれど就職先が決まらずに暗澹とした思いでアルバイトに励んでいた二十二歳。

あばたもえくぼとは言っけれど、なんでわたし。

与えられた部屋でクッションのようなものを抱え、じろつと不審な

目で見るわたしの前に、彼はなんと跪くようにして、手を取った。

何故か通じる言葉で、真摯に口説く。その求婚は連日続き、三か月の末に、わたしは根負けしてしまった。

頷いた瞬間の彼の嬉しそうな笑顔が忘れられない。

数年後、生まれたばかりの子どもをあやしなから、こっそりと囁かれた言葉でうっかり泣きそうになったのは、わたしだけの秘密だ。会った瞬間、わたしだって物凄く相手が好みで一目ぼれしてしまったことも、悔しいから絶対に言ってやらない。

分不相応かもしれないけれど、わたしだけを心の底から想ってくれるひととして結婚したくなかったから、返事を渋っていただなんて

——彼と出会う一週間前に、わたしは地球での家族を事故で全て失くしていた。

誰もいなくなってしまった築三十年の二階建ての家は広すぎて、悲しくて。

夜、いつも浅い眠りばかり繰り返していた。

わたしの心をあたためた、彼の一言。

幼い頃に母を失くしたらしい彼もまた、寂しいひとだった。わたしを見た瞬間、思ったそうだ。

わたしとだったら、子どもをとて大切に愛していけると。

なんでそんなことを閃いたのかは知らないけれど、再びできたこの家族が、わたしの居場所だ。

毎晩彼が眠った後、こっそりとその腕の中で囁く。ありがとう、だいすき、と。

わたしは知っている。彼がいつからか寝たふりをしているのを。明るいところで顔を見て素直に言えない妻の言葉にタヌキ寝入りで喜

んでいるのを。

この世界に来てわたしは新しい家族を手に入れた。それは何にも代えがたい、愛しいものだ。

もう、ドアを開いても向こう側にわたしの部屋はないけれど。

わたしはここで、ずっと生きていく。

繋がる扉（トリップ）（後書き）

ふっと思い浮かんだものを書いてみました。 気晴らし気晴らし。
色々シチュエーション的なものが浮かんだら書いてみたいとおもいます。

約束の履行（トリップ）

私は、昔から子どもが好きだった。

そして、友人からは隙だらけだと言われてきた。

だから、なのだろうか。

こんな事態を招いたのは――。

それはある晩の夢の中のこと。

綺麗な銀髪に榛色はしほみどりの瞳をした、綺麗で可愛い男の子に会った。

うつすらと緑がかったそのオッドアイがとても美しくて、ついつい、会ったばかりの子だというのにまじまじと見つめてしまったのだ。

すると、男の子はその視線を避けた。

失礼なことをしたかと思い、ごめんね、目が凄く綺麗だったからと謝れば、何故か啞然とした眼差しを向けられて、逆にこちらがきよとんとしてしまった。

それから暫く、その子とはよく夢で会ってお話をした。

どこか儚げな印象を受ける外見とは裏腹に、なんだかとても利発でやんちゃな子だったけれど、五歳くらいの子であればそれが普通かと思つて、とにかく可愛くて仕方がなかった。

夢の中の空間は、西洋風の広々とした、まるで物語に出てくるお城の一室のような場所で、そこでよく、彼と遊んだ。

甘えているのかよくよく抱きつかれたり膝枕を要求されたり頬に口づけられたりしたのは驚いたけれど、外国の子どもだからスキンシップが多いんだろう、ということと別に不思議には思わなかった。それに、寂しいけれどこれは夢なのだ。

ある日、彼が言った。

「結婚してほしい」と。

私はにこにこ笑いながら小さな頭を撫でて、こう答えた。

「あなたが大きくなっても私が結婚していなかったらね」と。

約束だぞ、と言われて何やら不思議な紋様のついた指輪をもらい、別れ——それから一週間、私はもう、彼と会える夢を見なくなってしまった。

思ったよりも楽しみにしていたらしいその夢を見なくなってから、気分が落ち込んで、友人たちにも心配された。

夢から起きた時に何故か手に持っていたあの指輪を大事にしながら、落ち込んでばかりいられない、と仕事に励んでいたある日。

珍しく長く取れた有給初日、まったりと自室で煎餅を頬張っていた私は、気付けば誰かに後ろから抱き締められていた。

会いたかった、と耳にぞくぞくするような美声が届く。

見上げた先には、銀髪に榛色の瞳の美青年がいた。

茫然としている間に煎餅は相手に食べられ——不思議な味だが美味しいとかなんとか言っていた——ついでに何かを言おうとした私の口も食べられた。

気付けば、あつという間に純白のドレスに身を包んでゴールイン。

あれえ？　なんて思っていたらきちんと手続きを踏んで会社は退職させられ、友人たちへの挨拶回りも終わり、家族にも年に一度は遊びに来ると言って、私は異国へ嫁いでいた。——異世界の。

ちょっと抜けてる所が可愛い、とたまにいじめてくる夫になった人は、間違はなくあの夢で会っていた男の子。

厄介な呪いを掛けられて子どもの姿でいたらしいけれど、実はれっ

きとした大人だったそう。：私よりも二歳年下だったが。
ちなみに、彼はある国の王子様で、王位には全く関わりのない気楽な五男だと言っていた。

ずっと後に聞いた話、彼のオッドアイは不吉だと忌み嫌われていたそう。それで、自分でも嫌だったその目を肯定してくれたことで、私が気になるようになったのだと。

好きになったのは、その心を和ませてくれる笑顔だ、とは言われたものの、私はただの一般女性にすぎないのだけれど――何が良かったのか、それは結婚して数年が経った今でもよくわからない。

不用意に約束なんてするものではない、と学んだ。

けれどあの時既に、私はおそらくあの綺麗なオッドアイに囚われていたし、今では大好きな子どもたちに囲まれて、幸せに過ごしている。

結果オーライって、こういうこと？

約束の履行（トリップ）（後書き）

旦那がなんか腹黒い…。

でもこんなのもいいかなー。

腹黒×天然。

なんで夢の中で会ったのかなんて、気にしちゃいけない約束。

ひとりといっぴき（トリップ）＜前篇＞

ヒトは嫌い。何もかも奪っていくから。

——ヒトは怖い。いつも、何かを企んでいるから。

「……けが、してるの？」

そこは、とても暗い場所だった。

血に濡れた脚は痛みを訴えていたけれど、それにかまっている余裕などない。

埃っぽい香り。土のようなにおいもする。

どこかの、土倉だろう。

いつの間ここにここへ逃げてきたのか覚えていないが、取り敢えず追手の気配はないとほっとした瞬間に、頑是無い声が耳に届いた。

高い位置にある、くり抜いただけの小さな窓から、月の光が忍び込んで、相手を照らした。

長い黒髪に黒い瞳の小さな少女だった。良くも悪くも平凡な顔立ちだが、その頬には赤黒くなった痣がある。

——その痣は、人の手形の形をしていた。

「わんちゃん…ううん、おおかみさん？」

きよと、と首を傾げ、少女は近づいて来ようとする。

ううう、とうなり声をあげると、一瞬躊躇ったものの、少女は足を

運ぶのをやめない。

ふと、気付く。少女は片足を引きずっている。

「ごめんね、こわいよね。でも、ちょっとだけさわらせてね」

威嚇の声をあげるが少女は動じない。伸びてきた手に、思わず噛み付いた。

だが、牙が刺さっても少女は身じろぎしただけで、何度もごめんねと謝りながら、反対の手を伸ばしてきた。

その手が、先ほど負わされた後脚の深い傷に触れる。

不快な感覚に、更に牙を食いこませようとした瞬間、仄かな温もりを感じた。

少女の手を離して目をやると、何故か傷の辺りが仄かな橙色の光に包まれている。

少女はとても、真剣な顔つきをしていた。

「……ふう……」

暫くして、少女は額に浮かんでいた脂汗を拭う。

そして、問いかけてくるのだ。大丈夫？ もう痛くない？ と。

驚いた。この少女は——治癒術が使えるのか。

「よかった、なおつて。あのね、これ、おばあちゃんがおしえてくれたんだ。まじゅつ、っていうんだって」

幼い少女は疲れた色を見せつつ、言葉を紡ぐ。

「でも、おばさんはキモチワルイっていうの。つかっちゃだめっていわれてるのに、きょうもけがをすることりさんをてあてしてあげたのがみつかって、ここにとじこめられちゃった」

えへへ、と笑う少女に、何故か苛立ちを感じる。

私、悪い子だね、と彼女は言った。おそらく、いつもそういつて罵られているのだろう。

人よりもはるかに良い視力で観察した結果、少女はあちらこちらに痣のようなものがあるのがわかった。

どうやら、ろくでもない人間に養われているようだ。

『…噛んですまなかった。お前はどうか、』「こちら側」に近い人間のようだ。——共に来るなら、連れていくぞ』

少女はびっくりしたように目を見開いている。そして、きらきらと目を輝かせた。

「すごい、おおかみさん、おはなしできるのね」

治癒術は他人にしか使えない。噛まれたくせに血の出た手を平気でそのままにしている少女に眉を顰め、ぺろりとその手を舐めてやった。綺麗に治る傷跡に、ますます少女は驚いていた。

おんなじことができるんだね、おおかみさん、白い毛がとってもキレイね……云々。

ほとんど、少女が話していたことに、頷きを返すだけだったが、時間は飛ぶように過ぎて行った。

朝日が昇り、肌寒いが夜ほどは寒くなくなった時刻。

人がやってきそうな気配を感じて、のっそりと起き上った。

毛皮にうずまりあったかーいと言っていた少女が、離れて行った熱

を感じて、身を縮こめてくしゃみをひとつした。

その安らかな寝顔に残る手の形をした痣は痛々しかったが、それまで消しては少女が厄介なことになりそうだと、治療を断念した。すぐさま怪我が治っていてはまた、詰られるだろうと思ったのだ。昨晚の誘いに、少女はごめんね、いかないと断った。

「わたしがいないと、おじさんとおばさんがこまるから」

子どもに似合わぬどこか悲しい頬笑みには、そんな顔をさせる自分にすら苛立ちが浮かんた。

別れの挨拶の為に、その黒髪に鼻先を寄せ——尻尾で頬を擦ってから、呟く。

——いつか、きっと。

それは、少女の知らない約束。

ひとりといっぴき（トニシッ）＜前篇＞（後書き）

この話だけ前後篇。

ひとりといっぴき<後篇>

——義務教育の中学校を卒業し、数日が経ち、十五回目の誕生日を迎えたその日。

私は、住んでいた所から追い出された。

制服や体操服以外の手持ちの服はごくわずか。

それ以外の持ち物も、ほとんどなく。

お金なんて、一銭もなかった。

異様に軽い小ぶりのトートバッグを抱えて、ふう、とある公園のベンチに座り込む。

父や母の顔は、覚えていない。生まれてすぐにどちらでも死んでしまったらしく、幼い頃は母方の祖母に育てられた。

祖母との暮らしが、一番楽しかったように思う。けれどそれも僅かな時間で終わり、五歳の頃、私は唯一残された親戚、父方の叔母の元に身を寄せることとなった。

ささやかながらに父母と祖母が遺した財産が目当てだったようだが、叔母夫婦の嫌悪の目はいつもついて回った。

キミガワルイ、アノ子ノ母親ノ家系ハ、奇妙ナ呪イノヨウナモノヲ使ウノヨ。

祖母の家系は魔女の家系だったらしい。日本にもそんなものが存在したのかと今では思うが、記憶を辿れば、先祖はどこか違うところの出身だと言っていたような気がする。私は黒髪に黒い瞳だし、平凡な容姿だから、外国の血が混じっているとは全く感じないのだが、祖母は私に一つだけ、魔術を教えてくれた。それが、叔母の言うところの「気味が悪い」原因。

呪いなど使えず、その癒しの魔術だけしか使えないのだが、都会から少し離れた、やや寂れた田舎に住んでいた二人には、怪我をしている動物を拾っては魔術を使って傷を治す私は、不可解で気色の悪い存在だったのだろう。

よく、殴られたり閉じ込められたり食事を抜かれたりしたが、虐待にしては軽い方だったと思う。

彼らは所詮、お金がほしかっただけ。得体の知れない姪の存在は、極力無視をしていたから。

とうの昔に遺産は使い切られ、一筆書かされて私は追い出された。その、遺産は自分の為に全て使われた、ここから出て行くのは自分の我がままだ、というような文章を書かされた理由は、私がどこぞでのたれ死んだ時の保険だろう。

それで逃げ切れるとも思えないが、私には親しい人間もいないし、どこかで死んでしまっても気付いてもらえないかもしれない。

行く所もないし、初めてのホームレスになることになった。初・公園生活。

今まで生きてきた中で、外で眠ることはたくさんあった。流石に屋根の無いところは初めてだが、どうにかなるだろう。

あまり使われていないその公園のベンチに座ったまま、遊具の一つを、今夜は寝床にしようと決めた。

立ち上がり、雨風をなんとか凌げそうなその遊具の中に入ってみる。小さいし固いし下は地面だし、寝心地は最悪だろうが、何とか一晩は過ごせるだろう。

ぼうつと外を眺めているうちに、夜になり、雨が降ってきた。

直接雨粒は当たらないが、地面と続いている為に、足元が濡れてくる。

尻を浮かした座り方で堪えるが、いつまで耐えられるか。

おなかがすいた。

さむい。

ぼうつとそう考えながら、膝を抱えて目を瞑る。

いつの間にか、濡れるのも構わずに地べたに座り込んでいた。

そういえば昔、お仕置きで土倉に閉じ込められた時に出会ったあたかな温もりは、本当にあったことなのだろうか。

煌めく白い毛の狼なんて、あれ以来一度も見たことが無い。

叔母の元に引き取られてから唯一の、温もりのある記憶は、今では遠くて——本当にあったことなのだろうかと悩む。

けれど、思い返すのは、暴力を加えられて、酷く痛めてしまっただけから、軽く引きずるようになっていた右足が、もう治らないと思っていたのに、驚異的な回復を見せたこと。

こちらに関心を示すまいとしていた叔母達はどうかやう気付かなかった。たよただけれど、足を治してくれたのはあの狼だと、確信があった。あの夜の記憶を思い出すだけで、心が温かくなる。

大きくなるにつれて、人が嫌いになった。

外面だけは良い叔母。親がいないと嘲笑う同級生。

動物の方が、こちらの愛情に応えてくれるということを、あの記憶を思い出すだけでも思ってしまう。

だけれど、成長して思うのは、あの狼は一体何者だったのかということ。

どう考えても、話せる狼なんているはずがないのに。

ぼうつと思考を巡らせていると、座っている部分から雨水が染みて、不快を感じた。漸く自分が座ってしまったことに気付くが、いまさら遅いと腰を上げる気力もない。

——得体が知れなくてもいい。あの獣は、祖母以外で唯一温もりをくれたのだ。もし、叶うならば。

「会いたいなあ……」

ぼそりと小さく呟いた声音は、雨音に消された。

あたたかな何かに包まれている気がする。求めていたものに。
迎えに来た、と誰かが言った。
額に何か、柔らかな感触が触れた――。

目を覚ました時、そこは公園ではなく、立派な寝台の上だった。
近寄ってきたのは幼い頃に会ったあの白い毛に赤い瞳の狼で。

口を開く前に、瞬く間に狼がいた場所に、見知らぬ人が立っていた。
限りなく白に近い白金の髪、切れ長の瞳は鮮やかな緋色。とても整った顔立ちの青年だった。

呼んだから、遅くなつたが迎えに来た、と彼は言った。

なんと、そこは地球とは異なる世界だった。母方の祖先は、どうやら元はこの世界の人間だったらしい。魔術とはこちらでは割と知られていて、その力を使える人間は魔族と言われているそうだ。

彼が脚を怪我していたのは、暗殺を生業にする者たちに追われていたため。

ある国の、地位の高い貴族であるらしい彼は、とても魔術に長けていて、あの土倉までやってきたのは、転移の魔術を使用したさいの、偶然の出来事だったそうだ。

帰ることは簡単にできて、来ることは難しい。

私が彼を呼んだことで、道をつなげやすくなったとか何とか――正直、ちんぷんかんぷんだ。

彼は、ただの人間ではなく、魔獣という種族で、人の姿と獣の姿の両方を持ち合わせているという。

怖いか、と問われたが、そんなはずがない。人よりも獣の方が好きだというと、何故か微妙な表情を向けられた。

それから、彼女はその世界で、白金の髪の青年の庇護の下で暮らし始める。

ただお世話になるのも嫌だ、と彼の侍女として働くことになった彼女を、彼はいつも困ったように、けれど温かく見守っている。

それを日々見ている使用人達は一様に思う。うちの旦那様は明らかにべた惚れなのに、あの少女は気付いていない、と。

憎からず思っているだろうとわかるだけに、早くくっついてしまえばいいのに、と。

恋人ではないのに時折異様に甘い雰囲気醸し出している両者のことを、周囲はやきもきしながら呆れて見守るのだった。

彼らのじれったい気持ちは、数年続いたとか、続かなかったとか……。

彼女はやがて、思い直すようになる。

ヒトは嫌い、獣の方が好き。

——でも、人にも色々いて、好きになれる人もたくさんいる、と。

ひとりといっぴきへ後篇へ（後書き）

今までのが割とすぐ突っ走ってたので。今回は割合純情組で。

飛んで火に入るなんとやら？（トリップ）

わーお、なんて呑気にオーバーリアクションしている場合ではないよな、と一人思った。

……実際は、僅かに目を見開いただけだったが。

目の前で、真っ赤な目を涙で潤ませ、更に赤く染めている可愛い生き物がいる。

なんか、ぷるぷるしてるし。可愛いなあ。

うーん、どうしようかな。

これはもう、これしかないだろう。

——イタダキマス。

合掌。

「そうか、迷子になったのか」

「…うん、帰れなくなっちゃったよう…」

ぐず、と鼻を吸る音。

傍に寄って、ぽんぽんとその背中を軽く叩いてやる。

出会ってこの方、たった数時間。その間、優しく相手をしていたからか、相手はすんなりとその身を擦り寄せてきた。

……可愛いなあ。

「でも、親御さんが心配してるんじゃないか？」

「ううん、父さんと母さんは、僕のこと大切に思ってくれてるけど、らぶらぶだから、早く独り立ちしてほしかったみたいで、ばいばいって」

「……そうか」

神妙に頷いて見せると、ふと思い付いたようにこう言った。

「実は一人で寂しかったんだ。よければ、一緒にいないか？」

唐突すぎるかとは思ったが、一度くらい断られるのを承知で言ってみた。すると驚いたことに、相手は嬉しげに了解したのである。

ちよつと事がうまく運びすぎているくらいはあるが、自分は好機をみすみす逃すような人間ではない。

数年前、わけもわからぬうちに見知らぬこの地へ唐突に移動していた、周囲にはほとんど人の気配もなく、何とか自給自足で暮らしていたわけだが——まさかこんな展開が待っていたようとは思ひもしなかった。

こんな幸運に見舞われるならば、たとえここが異世界であろうとも、人との関わりが、山を二つ程越えて十数人程の小さな集落に辿りつくという極端な程に少ないものであっても良い。

トリップ万歳。

目の前にいる幼い白銀の竜に優しく微笑みかけながら、常人よりもはるかに優れた容姿と能力とぶつとんだ思考を兼ね備えた少年は、内心で非常に腹黒いことを考えていた。

仲良く暮らしているうちに、数年が経ち、竜もそれなりに成長した。ちなみに可愛らしいその竜は、一人称こそ「僕」だが、性別は女の子。

人の形とかなれる？ と何気なさを装って尋ねた黒髪黒瞳の美貌の青年に、疑いもせず頷き、嬉々として転化してみせた彼女がどうなったかは——言わずとも知れたことである。

ある日、突然異世界に来ました。

周囲には誰もおらず、仕方がないのでアウトドアな生活を始め、自給自足暮らしが二年程続きました。

人里の存在も知り、必要がある時はそこへ行っていたものの、もはや他人とのかかわりも面倒でトリップした山奥に小屋を建てて住んでいたある日、一匹の小さな竜に出会いました。

泣きはらした赤い瞳はとても綺麗で、一目で心を奪われました。

正直、竜のままでよかったのですが、人の形をしていたほうが、何かと便利なので、よくその姿でいるようにお願いしています。

寿命などは違うかもしれませんが、どうやら髪や爪があまり伸びないことから、身体の老化がひどくゆっくりになっていることがわかったので、然程問題ないでしょう。

何が言いたいかっていうと、邪魔しないでくださいねってことです。わかりましたか？

ある山賊の一団は、たまたま隣国との国境をめぐらにしようとした所、愛らしい少女と戯れていた青年にこてんぱんにやられ、消えない恐怖を刻み込まれて、以来相手の僕と化したとか——無垢な竜の少女はいつまでも、彼を疑うことを知らなかったとか。

ある意味、裏の世界の人間達の間で語り草になった、そんな話がある。

彼と彼女の二人だけの世界は今日も、平和だった。

飛んで火に入るなんとやら？（トリップ）（後書き）

やっちゃった感がありますが、すみません。楽しかったからいいかなって。

お気に入りや評価してくださってる方々、本当にありがとうございます！！

雨夜の月（異世界恋愛）

何度この想いを口にしたら、貴方は受けとめてくれる？

「——リシア様」

鳥の囀りとあたたかな木漏れ日に包まれながら、ゆっくりとその両目が開かれる。

数度の瞬きの後に焦点を合わせた、春の陽の光に煌めく一対の美しい青玉は、声を辿って一つの人影を捉え、輝きを増した。

「……レイド！」

身を起こすと、ふわりと長い桃色の髪が揺れた。

明るく輝く顔はまだ少しあどけなさを残し、美少女と言える外見だが、愛らしいという表現がよく似合う。

年の頃は十七、八歳といった所のその少女は、満面の笑みを浮かべて相手の名を呼んだ。

「——リシア様、講義の時間は過ぎていますが」

淡々と、感情のない声音は述べる。

冷たい緑の瞳が、彼女を射た。

「……だって、歴史の講義なんて、今更いらないのに……」

拗ねたように唇を尖らせる少女は大変可愛らしかったが、相手は微動だにせず、無言で見上げてくる。

「……」

「……」

「……わかったわよう」

暫し無言の闘いの後、先に音上げたのは少女だった。
むつとしたような顔を、良いことを思い付いたとばかりに喜悦に染める。

そして、すつくと『木の枝の上』で立ち上がり、

「……リシアさ、」

驚いて顔を上げる緑の瞳を無視して、何の躊躇いもなく彼女は、

「……えいっ！」

——木の上から飛び降りた。

「……っ」

どさり、と音がした。

息を飲んだ音と、温かな温もりを感じて、少女は満足げな笑みを浮かべる。

はあ、と呆れと安堵の混じった溜め息を吐いた黒髪の青年は、少女

を抱き留めたまま、咎めるような視線を寄越した。

「リシア様……危ないでしょう」

無表情ながらに眉を顰めた、涼しげな美貌の持ち主である青年の抗議の声に、桃色の髪の少女は明るく笑い掛ける。

「大丈夫っ！だって、レイドが受けとめてくれるってわかってたもの」

にこつと微笑むが、青年は嘆息を返すだけ。

何かを口にしようと薄い唇を開いたが、声を発する前に再び閉じ、諦めたように肩を落とすのだった。

「……それで、木の上で何を？」

すとな、とぶつきらぼくに地面に下ろされて、しかしその手つきは優しかったことにちゃんと気付いていた少女は、嬉しそうに、高い位置にある青年の顔を見上げた。

「ん？お昼寝よ」

「……………」

青年は、疲れたように息を吐き出した。

リシア・シエルティーザ。

その名は有名だった。

淡い桃色の髪に、深い青玉の双眸を持った、華奢な身体付きをした可憐な容貌の少女の名だ。

容姿の美しさだけでなく、彼女は、元素の聖霊全ての寵愛を受け、己の意志で彼らの力を使うこともできる『聖なる巫女』であつた。

そして、僅かながらに癒しの力をも持ち合わせた『聖女』でもある。

——そんな、神に愛されているとは思えない、奇跡のような存在は、この世に生を受けて僅か十八年の若い少女でありながら、『元素の聖女』をはじめとする多数の称号、呼称を有していた。

永世中立大国レゼナのエルスティア大聖堂。

そこに身を寄せる彼女は、日夜能力の制御の修業と、人々に癒しを与えるお勤めを持っている。

稀有なる存在——いつ何時、下賤な輩に狙われるとも知れない身なので、リシアには当然の如く護衛がいた。

エルスティア大聖堂には、多くの聖女が集められているが、その中でもリシアは類を見ない存在なので、護衛騎士が一個小隊程いる。

その、筆頭護衛騎士の名前が、レイクオード・エル・スティーリア

——愛称、レイド。

黒髪に緑の瞳の、冷たい美貌を持った二十一歳の青年である。

無口は無表情に無愛想と良いとは言えない三拍子が揃っている彼だが、剣技の腕は神業並だ。

故に、その若さでリシアの筆頭護衛騎士を務めているのである。

……そして、リシアは彼に全幅の信頼を寄せ——恋心まで、抱いていた。

リシア達聖女は、婚姻を禁止されていないので、別に良いだろうという思いのもと——猪突猛進、思い立ったが吉日のリシア・シエルティーズは、常日頃から特攻を掛け続けているのである。

暴走系聖女は、日々自分の護衛騎士に熱烈なアプローチを掛けているのだが、如何せんレイドが朴念仁のせいかな……全く相手にされてお

らず、はいはい、と適当に返事をされ、のらりくらりと躲され続けているのが現状であった。

「……………」

「——何ですか？」

隣を歩いているレイドの横顔をじっと見上げていると、不審そうに問われた。

リシアは素直に口を開く。

「レイド…好きよ？」

彼女はかなり真剣に、想いを口にしたのだが、

「——リシア様」

ぴたりとレイドが止まって、リシアを見下ろす。

緑の瞳の人間は、とても稀だ。彼女は彼の森を思わせる瞳が大好きだった。

まっすぐな深みのある大好きな緑に、思わず見惚れる。

「…え？」

「……そろそろ正午です。早く帰らないと司教から長い説教が…」

「え、嘘、じゃあ急がなきゃ——って！」

毎回毎回小言を頂く人物のことを思い描き、焦ってつい反応したりシアは、直前の告白を思い出して、顔を顰めた。

せっかく告白したのに、真面目な顔で何を言うかと思えば。

ちよっとどきつとして、損をした。

「またはぐらかして…あ、待って、待ってー!!」

長い足ですたすたと行ってしまうレイドを焦って追い掛ける。

幸い、彼が途中で歩調を緩めてくれたので、追い付くことができた。しかし、その時はもう、リシアは肩で息をしていた。

「もー、馬鹿ーっ」

罵りながら、レイドの腕を掴む。

先に行ってしまったないように、と。

「……………」

諦めているのか、レイドは何も言わなかったが、さりげなく歩幅をリシアに合わせてくれた。

そのことに気付いたリシアは、嬉しそうな笑みを溢すのだった。

——聖女の想いが伝わる日は、いつのことやら。

彼らは今日も、不思議な主従関係を築いている。

雨夜の月（異世界恋愛）（後書き）

携帯HPの方で連載しつつちつとも進まない話の第一話を改稿。元は読み切り短編だったのでさらっと読めるかと。なんとなく載せてみました。一応サイトでは看板的ペア。こちらでは連載の予定はありません…でも何か反応があったら嬉しいな。

勇魔の小唄（異世界ほのぼの）〜ばとる・わん〜

「——覚悟！」

いきなり、物陰から飛び掛かってきた人影があった。
太陽を背にしているため、逆光でその姿は見えない——が。

「……あーはいはい。俺は今眠いから、遊ぶのは後でな」

欠伸を噛み殺して、木陰で寝そべったまま、ただ手をのばしただけで、彼は『それ』を止めた。

じたばた、じたじた。

襲撃者は彼の手掴まれたまま、暴れた。

「は、離せーっ！！」

「わかったわかった、後でな……」

そう、夢現つで呟いて、彼は眠る体制に入る。

明らかに昼寝に戻ろうとする姿勢、伏せられた目蓋に、相手は憤慨した。

「こら！ 私を誰だと思っておる！ よいか、私はな——」

「魔王だつて言うんだろ？ その遊びはいい加減聞き飽きたつて。つたく、最近のガキは妙な遊びしやがって……」

「遊びでもガキでもないわ、無礼者！」

あんまりそれがもがくので、彼は手を離してやった。

急に自由にされて、一瞬慌てたようだったが、なんとか体制を整え、たたらを踏みつつ地面に足を着けると、それは胸を張って偉そうにふんぞり返った。

「よいか！ 私の名はメリエルランス・セティア・ヴァルガナ——」

「メルだろ。わかったってば。いいから寝かせろよ、俺は眠いんだって……」

「略すなー！！ しかも遮りよって……っ貴様、私をいつまでも愚弄するでないぞー！！」

「いーじゃんメルで……可愛いし。っーかお前、子供のくせに言葉づかい爺臭いよな……女の子なんだから、もうちよっと可愛く話したらどうだ？」

腕を組み、頭の下で枕にしながら目をやると、それは、拳を固く握り、地団駄踏んで悔しがった。

「子供ではないと言っておろう！！」

——と、言われても。

くるくるした黒く長い髪。

つぶらな同色の瞳に、ぷくぷくした薔薇色のほっぺ。

おまけに、彼の膝位の小さな背丈。

——どこからどう見ても、七、八歳程の少女だった。

十年もすれば傾国の美女になれそうな程、容貌は並外れて整っているが、その容姿と深い闇色の色彩、奇妙な言動以外はなんら他の子供達と変わる所のない、こども。

「どう見ても……こどもだよな」

彼がそう言うのも無理はなかった。

しみじみと言われたことで、余計に少女は腹を立てたようだった。

「ええーい、だから、今の私は魔力が足りずに縮んでいるだけだとは度も言っておるうが！……今度こそ我慢ならん、勝負だ勇者っ！」

いつの間にか少女は小さなナイフを手にして、それを両手で身体の前に構えていた。

「確かに俺は勇者だけど——って」

その光景を見た彼の表情は険しくなり、言葉を切って起き上がる。

「おお、ようやくやる気になったか。見ておれ、私が本気を出せば

——」

「くらー！」

大きな声で怒鳴られて、少女はびくうつ！と肩を縮めた。

「刃物なんか持ったら危ないから駄目だって、何回言えばわかるんだー！」

「…な、何だ…私は…」

「言い訳しない！そんなにお仕置きしてほしいのか？」

眉間にくつきり皺を刻んだ彼に恐い声で言われて、少女は飛び上がる。

「い…嫌だ！」

思わずお尻を押さえて後退った。

この間同じようなことがあり、彼女がどうしても刃物を手放さなかったその時、彼はお仕置きに、彼女のお尻を叩いたのだった。

そんな屈辱は生まれてはじめて、おまけにかなり痛かったので、身体にはすっかり恐怖が染みついている。

それで少女は、上記のような反応を示したわけだった。

「くっ…覚えておれ。力が戻ったら、真っ先に貴様を八つ裂きにしておやる！」

——悔しそうに言う少女には、一歩下がって怯えているせいも全く迫力がない。

少女の言うことなど全く意に介さずに、さり気なく抜き身のナイフを取り上げた青年は、それを、放り出してあった鞘に仕舞った。荷物の奥に押し込むと、少女の短い手をぐいっと引く張る。

「うわっ…な…！」

胸に抱き込まれた。

と思ったら、そのまま彼は再び横になった。

——今度は、少女を抱き締めたまま。

「な、何をするかこの不埒者！ 離せ、離すのだ…！」

ばたばた暴れる身体をやんわりと押さえ込み、片腕を枕として提供してやると、彼は目を瞑った。

「……一緒に寝れば文句もないだろ。んじゃ、おやすみ…」

言うが早いから早速就寝。

健やかな寝息が少女の耳に届いた。

「おい、こら、勇者！——ウィル！」

返事は無し。

どんなに抵抗しても、彼の腕に阻まれて逃げられない。

穏やかな風が、大地を撫でていった。

青年の態度にむっとしながらも、午後の心地良い日差しに誘われて、少女はうとうとし始める。

初めはそんな己を叱咤して、眠りかけてははっと目覚める、という行為を何度も繰り返していたが、その内とうとう睡魔に負けて、彼女もまた、安らかな微睡みに身を任せたのだった。

青年の名前は、ウィルゼイア・ランディという。

割と端整な容姿の、優男と言っていい風体をした金髪の青年だが、職業、尊称、共に勇者である。

少女の名は、メリエルランス・セティア・ヴァルガナディータ・カラム・セイン。

長つたらしいが、本名だ。

今でこそ諸事情で愛らしい少女の姿をしているが、正真正銘、れっきとした魔王である。

ではなぜ敵対するはずの二人が共にいるかというと、少々鈍いところがあるウィルゼイア——ウィルが、勇者を見つけて倒さねばと攻撃していったメリエルランスを難なく捕まえ、その際の会話の端々から、少女に親がないということを読み取り、なにぶん人が良い——それはメリエルランスにとっては大きなお世話だったのだが——

為に、保護者代理になろうと勝手に決めて、以来共に旅をしているのだった。

その道中、幾度となくメリエランスはウィルの命を狙っているのだが、今回のように変わった遊びとして認識されるだけで、ことごとく失敗している。

もうすっかり、最近は甲斐甲斐しい父親化してきている勇者なのであった。

鈍感お人好し勇者と、ちび美少女魔王の旅は、まだまだつづく。

勇魔の小唄（異世界ほのぼの）ばとる・わん（後書き）

これもまたHPの方で短編から派生して連作にしてる話です。やや改稿して載せてみました。こんな魔王様と勇者もありじゃないかなあ、なんて。のほほんギャグな話。

生まれ変わったその先に（転生トリップ）

ある日突然、俺の人生は終わりを告げた。

思えば、あまり幸運とは言えない生だったような気がする。

幼い頃の記憶はあまり思い出したいくないものだし、それ以降も順風満帆とは言い難いもの。

そして十八の身空で通り魔に刺されて死亡——だなんて、世間一般で見れば不幸、というのだろう。

もしもまた人に生まれることが出来たなら、平凡でいい、温かな家族が欲しい……確かに、そう思っていた。

そりゃあ、確かに、愛されたいとは思っていたけれど。

「え、と……」

「好きだ。愛してる。結婚しよう」

まさかこんなに熱烈に愛を語られるとは思わなかった。

地球という惑星——世界に生まれ、十八歳で死んだ時、俺は確かに男だった。

けれど気がつけば再び生まれ落ちたのだが……生憎、前世と同じように家族には恵まれず。明らかに違う所と言えば、どうやらそこが地球とは違う世界であるらしいこと、性別が女になっていたこと。生まれた時は自分が所謂転生と呼ばれるものを経験したという自覚はあった。けれど、ある程度成長するまで、「私」という意識は眠っていたようで、気がつけば、ぼろぼろにくたびれた服を着て、路上で物乞いをしていた。

それは多分、三歳の時だったと思う。

徐々に徐々に前世のことを思い出して、その時の知識を活かし、何とか二年程生き延びた。

けれども、盗んだパンも凍りついてなかなか食べられないような寒い冬のある日、ひとり凍死しかけていたところを、ある相手に拾われた。

それは、この世界で魔族と呼ばれる力を持った存在の侯爵家の次男だった。

温かな寝床、温かな食事。

ただ拾ってくれただけでなく、なんと家族の一員として、育ててくれた。

魔族とは魔法や魔術を扱うのに必要な魔力を人の数百倍も備えている、力に溢れた種族だ。

魔力の量が多いせいか、寿命も人の五倍程長く、一気に老衰して儂くなるまで、いつまでも若々しい。

だから、私にとって拾ってくれたその人は、父のようでもあり、兄のようにも思っていた。

大切な大切な、家族。

魔族はあまり人間に良い感情を抱いていないのだけれど——争いをあまり好まないのも、魔族からは干渉することが少なかったのに対し、人間は魔族を恐れて勝手に攻撃を繰り返してきた歴史があるからだ——私は、人にしては珍しい程に魔力を持っており、あまりに幼く不憫だったようで、出来た性格の彼らは、私を快く迎え入れてくれたのだ。

前世では決して得られなかった、家族の温もり。私が一番欲していたものを、彼らはくれた。

生まれ変わって性別が変われば、身体に心もつられるのか、前世の記憶こそあるものの、私はすっかり少女としての生活に馴染み、思考も変わったように思う。

確かに、今の自分に恋愛嗜好を聞かれれば、男性を相手に考えるだろう。けれど、まさに交際どころか結婚を申し込んできたのは、予

想だにしなかった相手——私を拾ってくれたひとだった。

ええと、あの、なんて困っている内に、家族全員がやってきて、いつの間にやらおめでたいとどんちゃん騒ぎになり、あれよあれよという間に、結婚式が明日に迫っていた。

確かに、あのひとは好きだ。敬愛している。誰よりも造作も性格も優れているように思うし、この世界で一番好きなひとだろう。でも、結婚、と考えるとよくわからない。

ひとり悩みながら自室で膝を抱えて考え込んでいると、来客の合図があり、ドアが開かれた。

立っていたのは、明日結婚する相手。

「俺のことが嫌いか」

そう、彼がたずねてきたことに、驚いた。

そんなはずがないとぶんぶん首を横に振れば、では、他に結婚してもいいという相手がいるかと聞かれ。

いない、と答えた。

「俺との結婚は嫌か」

嫌じゃない、と答えて、ふと気付いた。

嫌じゃ、ないのだ。前世の記憶から、結婚が意味することなど知っている。夫婦となることが嫌ではないのだと気づいて、他の誰かでは嫌だということにも、考えが至った。

つまり、それは。

悩むこともなく——わかりきっていてもおかしくなかったこと。

「好きです」

脈絡もなく答えた瞬間、息が出来なくなった。

この世界のひとはスキンシップが多いな―と、拾われてからこの方、家族皆に頬や額に口づけを落とされまくった身としては、てっきり数年前から彼に唇に口づけられるようになったのも、その延長だとはかり考えていたのだけれど……数日後に、流星に唇は特別であると教えられるのだった。

元々魔力の高い人間であれば、婚姻を経ると魔族の仲間入りを果たすのだということだ。

彼らは色々とすったもんだありつつも、割合幸せに暮らしていくのです。

生まれ変わったその先に（転生トリップ）（後書き）

さらっと読める転生ものを書こうと思ったのに何故かこんな話に。
あれえ？

最近短編ばかりでごめんなさい、なかなか筆が進まず…。

贖いの月（異世界）

——あるところに、悪い魔女に呪いをかけられた一人の王子がいた。

悪い魔女は、呪いをかける際にこう告げた。

「今から二百十六回目の満月が昇る夜までに、この呪いを解かないと、死ぬまでその呪いを解く機会はやってこないだろう」と……。そのまま魔女は消えてしまった。

呪われた王子は、呪いを解くために、今でも魔女を追って旅をしている――。

旅の語り人が紡ぐ物語に、人々は聞き惚れていた。

そんな中、旅装に身を包んだ一人の人間は、酒場のカウンターで、グラスを片手に鼻で笑う。

「はん、『贖いの月』…ねえ？」

主役である王子は勇猛果敢で、今のは物語の序章。

語り人が語る冒険譚に通りゆく人は皆振り向くが、『彼』は、全く興味を持っていなかった。

語り人は、『騙る』ことも、よく知っていたからだ。

椅子を引いて立ち上がると、代金をテーブルの上に置いて、店を出る。

丁度、語り人の話は、呪われた王子の話から、別の話にかわる所だった。

『彼』は、語り人がいる場所とは反対の方向に、そのまま立ち去った。

——さてお次は、呪われた王家の姫君のお話だ。
またあるところに、小さな国があった。

その国は今にも滅びそうだというのに、後継ぎの王子は頼りない。
そこで、王様は精霊と契約を交わした。
国を加護し、王子を逞しくしてくれと。

精霊はその願いを叶え、国は豊かになった。
けれど、王子は二つの人格を持つようになってしまった。

今でも直系の、次代の王に相応しいと精霊にみなされた王子や姫
は、二つの人格を持つて生まれてくる。

だがそれは、一代に一人きり。

しかし、最も新しく生まれた姫君は、二つの人格を持つて生まれ、
先に生まれた王子も二つの人格を持っていた為に、二人目の王位継
承者になってしまった。姫君は不吉だと王家を追われた。

呪われた国の、呪われた王家の、呪われた姫の物語は、今もつづ
く――。

「呪われた、ね。…口で言うのは簡単だな」

風が運んできた語り人の物語を耳にして、『彼』は陰鬱に嘲笑し
た。

その表情は雰囲気は、間違いなく男のもの。
しかし、外見は――。

……風が、フードからこぼれ出た、艶やかな金の長い髪を、揺ら
した。

——さあ、何とも不思議な二人だ。

昼と夜には性別が変わる呪いをかけられた王子と、昼と夜では人格が変わる姫君。

対照的な二人は、未だに出会ったことはない——。

「…そう簡単に、人が出会えるわけないだろ」

呟いた声は、男にしては少し高い。

それでも口調や仕草は、男そのもの。

『彼』は、天空に視線を移した。

太陽が沈みそうになっている。

「——しまった。早く宿にいかないと」

そして、『彼』は宿屋へと足を向けるのだった。

くすくす、くすくすと、精霊も魔女も、魔法使いも皆笑う。

ならば出会わせましょう、出会わせましょう。

可愛い二人を逢わせましょう。

きつとこの退屈を消してくれるから。

楽しそうだから出会わせましょう。

運命の齒車は、くるりくるりと回る。

「――！」

「どうなさいました？」

立ち止まった『彼女』に、連れの男が訝しげに声をかける。

「いや……いや、なんでもない」

誰かに、呼ばれたような……。

「お急ぎください、スレード様。直に日が暮れます」
その言葉に頷く『彼女』は、ため息も吐いた。

「……あまり大っぴらに、その名を呼ぶなよ」

「ええ、心得ております。しかし、ここには誰もいないでしょう？」

笑う男に、『彼女』は、呆れたように苦笑した。

風の囁きのように、人ならざるモノ達は笑っていた。

もうすぐ、もうすぐよ。

可愛い王子スレードと、素敵な姫リシェリアが出会うわ。
あら、違うわよ。

そうそう、今はスレイトリシエルよ。

あら、そうだったわ。

ほら、日が暮れる。

二人とも、元の姿に戻るわ。

楽しみね。

ええ楽しみだわ。

どんな反応をするのかしら。

恋に落ちるのかしら。

でもあの二人はお鈍さんよ。

そうね、じゃあ、いつか結ばれるかもしれないということにして
おきましょう。

くすくす、くすくす。

笑い声は、誰にも聴かれることなく、空気に溶けた。

二人の、双つで一つの『贖いの月』と謳われる物語は……こうし
て、一つの実話へと移行を始めた。

どこかで、鳥の鳴く声がする。

空には黄金色に輝く真円の月。

少年は、美しいその満月を、苦渋に満ちた表情で見つめていた。

昨晚、彼は十七回目の誕生日を迎えた。

……そして今宵、彼は生まれ落ちてから二百四回目の満月を目にした。

——約束の『期限』は、刻一刻と迫っている。

宿の外の茂みに寄り掛かり、暗闇の中で整然と光る月を眺める少年は、手のひらに爪が食い込む程強く手を握った。

「もう……あまり時間がないな」

どうしようもない怒りと、何も出来ない自分への憤りとが混じり、時の歩みに流される身は諦めという思考に押し潰されそうになる。心なしかうなだれ、もがき苦しむ想いが痛くて再度拳を握った、その時。

今は静かにお眠りなさい

私の愛しき子供たち

耳朶を打った優しい音色に、弾かれたように顔を上げた。

「歌……？」

とうに人々は眠りについた真夜中。

その清らかな歌声は、すぐ近くから聞こえた。
立ち上がって、声の聞こえる方に向かう。

あなたが安らかに眠れるように
子守歌を歌いましょう
星の囁きが祝福の音を招き
あなたの心を慰めるように

——それは、古い子守歌。

ありふれた曲なのに、歌い手が違うだけで、これ程美しい旋律が
出来上がるのだということに、歌に興味のなかった少年は初めて知
った。

何時の間にか己を取り巻いていた負の感情が消え去っていること
にも気付かないまま、ただその歌声に、聞き惚れていた。
風が、喜ぶように舞いながら歌を運ぶ。

おやすみなさい

流れ星を追う夢を見て

明日は元気に過ごせるように

お眠りなさい

私の宝物

私の大切な子供たち

歌が終わる直前に、少年は、その歌い手の姿を目に捉えた。

背中の中程までにふわりとかがった、月光を反射する金色の髪。
長い睫毛の下の藤色の瞳は大きく、淡い色彩をしていた。
卵形の小さな顔、華奢な身体つき。

身に纏っているのは、何故かくたびれた男物の旅装だったが、それは少女の美しさを損なってはいなかった。

そう、言うなれば妖精のように可憐なその少女が、あの美しい歌声の持ち主だったのだ。

歌い終えた少女は、ゆっくりと息を整え——視線を、上げた。

少女と少年の目が、合う。

瞬間、木の葉がざわめき、風が旋回しながら流れた。

それが、精霊達の喜ぶ声だと知る由もなく、一人の少年と一人の少女は、呆然としてお互いを見つめ合っていた。

月の光が、二つの人影を照らす。

銀色の艶やかな髪に、金と紛える琥珀色の瞳の、中性的な美しさを持つ少年を見ていた少女が、先に口を開いた。

「……あの、貴方は……」

少し警戒するように固さの感じられる声に、はっと我に返った少年は、慌てて不審者ではないことを示そうとした。

「わ、悪い！邪魔するつもりは……ただ、歌が聴こえたから……」
「……あ。すみません、ご迷惑でしたか？」

少し警戒を解いた少女が謝るので、少年は首を降る。

「いや、迷惑なんかじゃ……」

口籠もり、何を言うべきかと思案した。

元々少年はあまり饒舌とは言い難い質であったので、怪しまれないようにと思っても、何を言うべきか言葉が見つからない。
それでも何かを口にしようと言唇を開いた瞬間、

「——月が、綺麗ですね」

少女の清らかな声が、先に言葉を紡ぎ、彼の言葉は口内に飲み込まれる。

彼女の視線は、淡く光を放つ満月に向けられていた。

「……え……？」

「私、月が好きなんです。太陽はずっと顔を見させてはくれないけど、月はいつでも素顔を曝していて、優しく見守ってくれているから……私の兄と、同じみたいで」

はにかむようにして少女はぼつりぼつりと語る。
少年は、控えめに笑う少女を、じっと見ていた。

——月が、綺麗……？

そんなこと、もう長い間感じたこともなかった。

彼にとって月というものは、己を戒める忌々しい呪縛を思い起こさせる存在でしかなく、その光が優しいとか、考えたこともなかったのだ。

まだその戒めの意味も知らなかった幼い頃は、確かに月を見て綺麗だと感じていた記憶があるのに。

いつから、自分はそんなささいなことさえ感じなくなっていたのだろう。

……月に罪はない。罪を持つのは人とそれに纏わる魔女や魔法使いといった特殊な存在だけだ。

返事を返せずにいたからか、少女は慌てたように、

「あ、いきなりこんなこと言われても困りますよね」

すみません、と謝られて、慌てるのは少年の方だった。

「いや、あの……考え事をしていただけだから！」

「ああ、そうだったんですか。てっきり何か気に障ったのかと……」

ほっと胸を撫で下ろす様子の少女に、良心が痛んだ少年は頭を下げる。

「ごめん、返事ちゃんとしなくて」

「いえ、いいんです！頭なんか下げないでください」

戸惑った声が聞こえた為に少年は顔を上げる。

すると、躊躇いがちにだが、少女がふわりと微笑んだ。

「——あ」

そのあまりに綺麗な笑みを目に焼き付けた瞬間、ことり、と自分

の中の何かが音を立てた気がした。

ふいに、月が雲に隠れる。

少女ははっとして、少年にぺこりと頭を下げた。

「すみません、私、もう行かないと——」

踵を返そうとするので、ぽうつとしていた少年は焦った。

「あ、あのさ……」

「——はい？」

少女は立ち止まって振り向いたが、思わず呼び掛けてしまった少年は、何を言っただけで良いやらわからない。

「ええと、君、名前は？俺は——」

しばしの、逡巡。

彼には、易々と名を口に出来ない理由があった。

けれど、何かに後押しされるように、素早く決断を下す。

「……俺は、スレードって言うんだ」

紡いだ真実の名に、少女は少し目を見張り、それからまた笑った。

「素敵な響きの名前ですね。私はリシエル。リシエルと言います——スレード、ごめんなさい。私、部屋に戻らなくちゃ」

残念そうにしながら歩きだした少女は、ふと、肩越しに言った。

「——貴方とは、また会うような気がする……」

「え？」

びっくりしている少年を置いて、にこっと笑った少女はそのまま
茂みの向こうへと行ってしまった。

「——リシエル、か…」

ひとり残された少年は、ぽつりと呟く。
どこかで……似たような名前を聞いた気がした。

『また会うような気がする』

彼女の言葉が、耳の奥でこだまする。

「——会えたら、いいな…」

それが、昼であれば、決して叶うことはないけれど。

小さな小さなその呟きを、月だけが聴いていた。

贖いの月（異世界）（後書き）

プロローグと第一話をがっちゃんこ。こちらもHPで一応連載扱いの作品です。その最初だけ…。これだけだったらある意味読み切りでもいいけるかな、と。

個人的には設定が気に入っていたりします。

福音の鍵（トリップ）＜前＞

それは、生まれ落ちた時から定められていたこと。

貴色と謳われる暁色の双眸を開いて周囲に向けた時から、自分の運命は決められていたのだ。

——女じゃなくてよかった、というのが、たった一つの救いか。

燦然と輝く太陽に舌打ちをして、その熱い光から逃れるように、森の木々の陰に横たわる。

柔らかな草は、白く滑らかな肌を傷付けることもない。

ふう、と息を吐いたその時、がさがさ何かが勢いよく、茂みの間から突進してくるのがわかった。

獣か、と警戒した瞬間、現れたのは——己の腰程の高さの、幼い子ども。

清潔に整えられていただろうと思われる短い黒髪には葉っぱが絡み付き、衣服も汚れている……そう思った途端、べちゃ、と目前で子どもが転んだ。

思わず駆け寄って手を伸ばす。

どんぐりのような丸い焦げ茶色の瞳から、ほろりと大粒の涙が転げ落ちた。

「っ痛いっ……」

膝頭が見える程に短い丈の脚衣、不思議な形の靴。簡素でありつつもどこか丈夫そうに見える白い上衣——それがＴシャツと呼ばれるものとは知る由もなかった——見たことのない服装のその子どもの何処に、それほど惹かれたのかはわからない。

一見すればどう見てもやんちゃな幼い少年であるというのに、相手

が少女だとわかったのは、本能のなせる技か。

「——大丈夫？」

近寄って、小さな体を抱き上げた。

きょとんと瞬きをするその表情は、小動物のようで愛らしい。

「おねえちゃん、だれ？」

泣きながら驚いたように尋ねてきた彼女があまりに可愛かったから——彼がそうしてしまったのも、仕方のないことではないだろうか。

「私は女ではないよ」

ふふ、と笑みを零して、柔らかな前髪を掻き上げる。その額に、祝福のようにくちびるをひとつ落として、印を刻む。

「——彼女に決めた」

凜とした声音で、彼は宣誓の祝詞を唱えた。

福音の鍵（トリップ）〈前〉（後書き）

前後篇。何が何やら。男の子みたいな女の子と女の子みたいな男の子のロマンスが好きすぎるといふ自覚はあります。後篇遅れたらごめんなさい。

福音の鍵<中>

幼い頃、ほんの数日だが、自分は「神隠し」とやらにあったことがあるらしい。

その時の記憶はほとんどないのだが、そういえばやたらと綺麗な女の人に会ったような覚えがあるような、ないような……。

時折夢に見るのは、緑に乏しいこの都会ではほぼ見られない、自然なままの山の木々——その一枚一枚の葉は、いつか博物館で見た珍しい蝶の羽のように美しく、透き通るような緑色をしていた。

あんな木は、地球ではまずない。夢の中のこととわかっていても、想像力がそんなに豊かでないはずの自分の夢に登場するにしてはやけに奇妙だと思っていた。

それが、実際に目にしていたとなれば、夢に見ていても不思議ではない。

生まれてすぐに両親が事故でなくなり、身寄りのなくなった自分はある家に引き取られ、そこで男として育てられた。血縁の家ではあったのだが、女だと呼ばれたら無理やりに見も知らぬ人間と結婚させられる可能性があったからだという。自分の血族は、血の繋がりを重視する割に、女の少ない一族で、女兒が生まれたとなればすぐさま誰かと婚約させられるらしい。

その閉鎖的な環境を疎み、飛び出したのが自分の両親。それを助けてくれたのが、育ててくれた人たちだった。

幸い、容姿も中性的だったため、何の疑いもなく男だと思われていたので、男なら用がないと、血族の者達の関心も薄くてすんだ。

そんな中、十八の誕生日を迎える前になって、育ての親も亡くなってしまった。

もう、守ってくれる人はいない。今まで男として育てられてきた分、どうやってこれから生きていけばいいのだろうか——自分は戸籍す

ら、男として届けられている。

幸いなことに残された屋敷と少しばかりの遺産があったから、思考に耽ることはできた。

そんな時だ。十八の誕生日を迎えた夜中、夢の中で、ふと思い出したことがある。

幼い頃に会った、とてもとても綺麗な女の人——今思い返せば、十代の中頃程の線の細いあの美貌の主が、にこやかに微笑んで、教えてくれたことがある。

額に降った、柔らかで仄かな熱。そこに、『印』を刻んだと。

会いたくなったら、いつでも呼ぶようにと——。

眼裏に、何故忘れていられたのか不思議な程に存在感の強い美しい人を思い描く。

「……我は、誓いの鍵を持つ者」

忘れては駄目だよ、と、何度も何度も、紡がれた言葉。

すっかり忘れていたことに罪悪感を覚えつつ、自然と口がそれを唱えた。

「至高の輝きを誇る太陽の眷属たる暁の空に繋がりし者」

……そういえば、何故だかこの部分を口にしていた時、序盤をやけに苦々しそうに口にしていたような。

気分が高揚する。どこか、熱に浮かされたように、ふわふわと頼りない感覚がした。

空が白み始めた頃、自室の寝台の上で、己の額に浮き出た鍵のような不可思議な形をした紋様のことなど知りもせずに、記憶を辿ってぼつぼつと呪文を紡ぐ。それが何なのか、知らぬまま。

「古の契約の下、我が身と我が魂を、半身の元へ——扉よ、開け」

暁の空を目にした瞬間に、世界は激しく揺らいだ。
そしてまた、次の瞬間――ひどくあたたかな腕^{かいな}に、抱かれていた。

「……やっと、来てくれたのか」

嬉しそうなその声音は、やや低いけれども、どこか神聖な響きを持つ音色。

見上げた先に、あの空と同じ薄紅と黄色を混ぜたような、美しい暁の双眸が在った。

福音の鍵<中>(後書き)

すみません前中後篇になりました。

福音の鍵<後>

重く見える黒髪がやや鬱陶しく感じていた自分のそれとは違い、相手の襟足がやや長い艶やかな髪は、見たことが無い程滑らかで美しい、星の光を織り交ぜたような銀色をしていた。

美髪であることの証拠に、陽の光をうけて天使の輪のような輝きが見られる。

何よりも、涼しげな目元の中で、空が白み、太陽が昇ってくる頃の明け方の空の色をした瞳は、何物にも代え難いもののように思えた。記憶の中にあるものよりもはるかに、実物の方が美しい。

自分がもう十代の後半なのだ、相手も当然年を取る。月日を増して、ますますその美貌には磨きが掛かったようだった。

茫然と相手に見惚れていた間に、どこかへ移動していたことに気づく。

何と子どものように片腕に抱えられて運ばれていた。

それでも身長は百六十を超えている。それなりに体重もある。しかし、暁色の瞳の麗人は、まるで重さなど欠片も感じていないかのようになんとかこちらを抱え上げていた。

相手は特に体格が良いわけではない。物語の中に出てくる、司祭とか神官とかいった人々のような不思議な白い衣装から覗く、自分を抱え上げる手は、白く華奢に見える。背も、抱えられているから判別が付け辛い、然程大きいわけではない、と思う。

怪力なのだろうか。びっくりだ。

幼い日に出会ったあの森のような所にいたと思ったら、今はどこかの建物の中。

西洋的というか、如何にも異国情緒の漂う乳白色の床や壁は、どこか温かみのある色彩で——日本の木造建築よりは遥かに丈夫そうだと感じる場所だった。

高級そうな絨毯が敷かれ、様々な調度品の並べられた広々とした一室に入り、猫足の長椅子に座らせてくれたと思いきや、隣にその人は座った。

抱きあげられた時に気付いたけれど——女性では、ない。胸がなかった。

よくよく見れば、男性に見えなくもない。性別を超越したような美貌の主なので、どちらにも見えるのだ。

何が何だかさっぱりわかっていないまま、気が付けば……結婚していた。

着たこともないようなひらひらとした簡素ながらに美しい純白の衣装を身につけて、手を引かれて向かった先は、恐ろしいまでに美しく、輝かしい誰かのもと。

一目見た瞬間、太陽の化身だと感じたことは間違っていないかったように、相手は太陽神だという。

ここは地球とは異なる場所で、自分の夫になったひとは、神に仕える位の高い神官。

暁色の瞳をもって生まれた者は、総じて太陽神に仕えることが決まっているらしい。何でも、俗世や人のことにはあまり関わりを持たない太陽神が、その瞳の色には並々ならぬ関心を抱いているそうだ。暁色の瞳を抱いて生まれるものはごく少ない。

数百年に一人、いるかいなか。

性別がどちらにせよ、太陽神は暁の子を自らの下に留めるのだが、女性であった場合は妻にもするそうだ。

良く言えば一途、悪く言えば独占欲が激しいために——確かに太陽には苛烈な印象がある——己の神官とした暁の子は他の人間と会わせたくないらしいのだが、ある時、一人の暁の子と約束をしたそう、男の神官の場合は、たった一人だけ、大切な人間——つまり恋人や妻——を作ってよい、という決まりができたという。

神がそれを許可しているのは、親が暁の色を抱いていれば、子にも遺伝しやすいと考えたかららしく。

神様は中々自分勝手らしい。

ついでにいうと太陽神は妹である夜を司る月女神を溺愛しているそうで、夜の色である黒髪を大層お気に召されたようだ。

「あの……俺でよかったの」

髪も短いし、男として育てられたので仕草だって女らしさのかけらもない。話し方だって粗野で、一人称も「俺」。

今更変えるのも難しいし、逆にきもちわるい気がするので、そのままにいるつもりだ。

そんな人間のどこがいいのか——そう尋ねたら、彼は美しい瞳を細めて、微笑んだ。

「君しか知らない。あの日、その真っ直ぐな瞳を見た時に、何故だか決めてしまったんだよ」

私のことがまだ信じられないなら、これから時間を掛けていけばいい。

夫婦としての始まりもあっていいと思わないか、という言葉に、流されてしまったのは、彼の瞳があまりに慈愛に満ちていたからか。

彼が何の変哲もないこの目を好きだというならば、こちらもまた、あの暁の清廉とした眼差しに囚われていたのかもしれない。

後に考えてみれば、なかなか傍若無人である太陽神の無理難題をさらりと受け流して関わっていたり、どこか似通った思考を見る時があることから——彼もかなり強引で自分勝手に一途だった。

見た目は深窓の令嬢といっても通りそうな外見で、その実腹は中々に黒いよう。

いくらなんでも一目ぼれしたからといって、相手の承諾なしに、勝

手に婚約の印を結んだりしないだろう。

幼い日にされた額への口づけは、こちらの世界へ通じる鍵であり、且つ、地球という婚約指輪のようなものだったらしい。

相手のあまりにも真摯な愛情に絆されて、いつの間にやら恋をしてしまったが——最近、もうすぐ生まれてくる子どもが黒髪に暁色の瞳をしていたら遠くへ、いつそ地球にどうにかして逃げようなどと画策している夫をどうすればよいか、考えあぐねているのが悩みである。

そもそも地球からこちらへ来られたのは、幼い日はただの偶然、十八になった時は婚姻の印があつて、彼がこちらにいたからで——こちらから地球へ渡る術は見つかっていないというのに、余程子どもをあの太陽神にやりたくないらしい。

ちなみに、男女の双子だとあの神は言っていた。この分だと、どちらもあるの神に取り上げられかねないので、何とか死守すべく攻防している毎日である。

福音の鍵く後く（後書き）

腹黒多いなー。

結構ワガママな神様が書きたかっただけかもしれません。

これ連載にしようかと思っただけと書ける自身がありませんでしたのでこんな形になりました。

毎度のことながら感想頂けると嬉しいです。いつもありがとうございます！

りとらる（転生トリップ）＜前編＞

昨今は物騒になった——よく聞いた、そんな台詞。

けれど、ニュースで見かける痛ましい事件も、怖いとか被害者が気の毒だとか思いはしても、所詮他人事だった。

画面を通した事件は、自分の日常からは遠く。

誰もが思う『まさか、自分が』というそのまさかが現実になるなんて、思いもなかったのだ。

——その瞬間のことは、ひどく断片的にしか思い出せない。

しかし強く記憶に残っているのは、腹部を襲った激痛と、襲撃者の酷く濁った瞳……。

気が付けば、意識は喪われ。

そうしてふっと気が付いた時、私はうまく身体を動かせなかった。視界に入るのは、ぷくぷくとした、紅葉のように小さな手のひら。

——なんと、赤ん坊になっていたのだ。

ショックを受けない為か自分という意識が目覚めるのは酷く短時間で、後から思えば授乳だとかオムツ交換だとか、精神的に恐ろしく負荷のかかりそうな出来事は覚えていないが、とにかく。

平凡ないち社会人女性だった私は、通り魔に刺殺され、生まれ変わったらしかった。

——そして、月日は流れ。

四歳にしては落ち着いて頭の回る日本人の少女として一般家庭で育っていた私は、ある日突然にして天涯孤独となった。

いくら前世の記憶があるとはいえ、今世の両親も大切な家族。悲しみを堪えながら児童養護施設に入る準備をしていた時のことだ。

眩しい光を感じたと思ったら、どこか見知らぬ場所に立っていたのは。

もこもこした兎のルームシューズ、薄いピンク色をしたワンピース型パジャマ——嬉々とした両親に買い与えられたそれらを身に纏ったまま、やけに眩しい場所にいた。

流れていた優雅な音楽は止まり、啞然とこちらを見る人々の顔、顔、顔。

今まで、こんなに大勢の人間に注目されたことはない。しかも、明らかにそこにいる人々は皆、日本人のようなアジア的な容姿ではなく、西洋人のように彫りが深く、それ以上に平均して美しい容貌の人々ばかりだった。

髪や瞳に鮮やかな色彩を持つ人々の中でも、一際目映い光を弾く金髪に深い空の色をした瞳を持った人物が歩み出て、真剣な眼差しでこちらを見たかと思うと——ふわりと相好を崩し、柔らかく微笑むあれよあれよという間に、何だか丁重に扱われ、非常に贅沢な生活が始まった。

それが俗にいう異世界トリップというやつで、歩み出てきた女帝に保護された自分は、『神の愛し子』とかいう異称を頂いていたのだけれど。

それらを知るのは、その世界の言語や常識を身につける、一年と少し後のことだった。

りととらへる（転生トリップ）＜前編＞（後書き）

平凡↓転生↓異世界トリップ（幼女）。

なんかこんな感じのことが頭に浮かんだので。

長編にしてもよかったです。が長くなりそうだったのでお試して短編に。後編はいつになるかわかりません。

りとるとらべるく後編>

戸惑いを宿したその瞳を見た時から——その手が思わぬ程優しく触れてくれた時から、私の一番大切なひとは、あなたになった。

——そのことに気付いたのは、大分後になってからだけれど。

生まれ変わって辿り着いた場所は、言葉がわからなくとも、すぐに文化レベルや日常生活の面からいって、地球とは異なる世界だとわかった。

中世ヨーロッパに似た舞踏会のような場所で人々が身に纏っていたのは、豪華なドレスだけれど、人体に影響を与えそうな程に苦し気な、コルセット付きのものはまた違う。

歴史の授業で教わったように、目が痛くなるようななければいい衣装でもなかったが、上品ながらに豪華絢爛という言葉が浮かぶような衣服で——何とも説明しにくいのが、貴人と思われる人々は贅沢な衣装を纏っていても、品を損ねない美しさの基準を持っているように、然程度肝を抜かれることはなく、ほっとした。

生活面では、どう考えても魔法のようなものが普通に使われており、地球とは違うものの水道や下水道の整備がされ、シャワーのようなものがあつたりとやけに利便性に優れていることに気付いた。

それらのことを総合的に考えて、異国に来たとも、タイムスリップを経験したとも思えず——どうやら異世界に来たらしいと結論づけたわけだった。

さて、そんな世界で。

どう見ても偉そうな、超美人の金髪女性に賓客のようにもてなされ、数日後に引き合わされたのは、彼女によく似た、けれど彼女のような圧倒的な存在感や華やかな笑顔のない、無機質な印象を受ける美少年だった。

わお、美少年、とじいつと見惚れていたら——前世の頃から綺麗なものを見るのは好きだった——表情に乏しく、他人を寄せ付けない雰囲気を発している少年が、自己紹介でもしようと思ったのか、渋々といった体で前に一步出た瞬間、満面の笑みを浮かべた美女に何か言われて、驚いたように目を見開き口を開けた。

それと同時に、私は背中を押され、体が揺らめいた。

金髪の美女が、私を彼に近寄せようとして軽く背を押したのだからけれど、生憎、力の差があるらしい。軽くではなく叩かれたような衝撃を唐突に加えられ、たたらを踏んだ私は身体を支えきれず、慣れない衣服の裾につまづき、思いつき顔面を床に打ち付けた。フローリングであれば歯を損なっていたかもしれないが、幸いにして、部屋の床には全面に見事な毛織りの敷布が敷かれ、転んだ場所には毛足の長い絨毯があったので、そこまで大事には至らなかった。けれどあまりの衝撃に、赤い液体が出てしまったのが見えた。

高級そうな絨毯が鼻血で汚れる！ と焦り、じんじんとする痛みも忘れ、慌てて両手で顔面を押さえると、周囲の方が騒がしくなった。美女は悲鳴を上げて、どうやら謝っているらしくぎこちない手つきで頭を撫でてくるし——正直血が止まるまで頭部に刺激を与えないで欲しかった——微笑ましげに様子を見ながら控えていた数人のメイドさんやら執事さんやらが真っ青になってすっ飛んで行った。

医者でも呼びに行ったのだろうか。

ティッシュとかないのかなーと思っていると、誰より先に差し出されたのは——まだ細い、小さな腕。

機転を利かせ、水差しの水でやや湿らせた真っ白なハンカチを出し、顔についた血を拭って、それを渡してくれたのは、あの少年だった。どうしよう、というおろおろとした戸惑いが浮かぶ瞳は先刻よりも余程人間らしくて、輝きが見えた。

優しく背中に手を添えて、近くにあった長椅子まで誘導し座らせてくれた。

この場にいる大人の誰よりも何故彼の方が対応が早いのだと呆れそ

うになったが、座つてすぐに別のメイドさんが介抱にきてくれ、少しして医者らしき人もやってきた。

後に知ることだが、この世界では黒髪の間人は珍しいらしく、特に瞳も同じ色彩をしている者はいないので——日本人の虹彩は焦げ茶色だが黒に見えるのでいいのだろう——私は本当に、稀なる賓客として迎えられていたそうだ。

この世界には女神がおり、その女神が好む色が漆黒であることで黒は貴色とされている。

そして落ち人と呼ばれる、いきなり何処かへ現れる人々も、女神の気紛れで招かれた客人と言われる。

両方を兼ね備えていた私は、女神を熱心に信望する金髪の美女により、何故か『女神の愛し子』という称号を頂き、彼女の息子——つまり、彼女によく似たあの少年と婚約することになっていたのだった。

その大事な客が美女の不手際により負傷した為に、大人達は混乱していたのであるような対応になってしまったらしい。

そんなこととはつゆ知らず、初対面で鼻血を出した女の子にも親切な少年に感動した私は、彼の表情が動く所がもつと見たい、などと思ったりしていたのだけれど。

精神的には彼よりもかなり年上のつもりだったので、それが恋の始まりだったなんて、全く気付いていなかった。

そして、金髪の美女はこの世界でもかなり力を持った国の女王陛下であり、その第二子にあたる為、目の前の少年は所謂本物の王子様だということ——よもや自分がその婚約者にされているだなんて知らぬままに、私は、言葉も通じないながら、よくよく少年に構ってもらいに行くことが増えるのだった。

物語は、何も知らない少女と戸惑う少年の出会いから始まる。

りとるとらべるく後編>(後書き)

これからずっとタイピングで終わります。たまにはこんな終わり方もいいかなあと…思い付いたらまた短編で続き書くかもですが、名前伏せたままは難しいのでどうか…。
名前はまた、後日ブログの方で。

勇魔の小唄々々ばとる・つー（前書き）

「勇魔の小唄」の続き？日常。まあこの話は単発読み切りなので、載せてみました。

勇魔の小唄♪ばとる・っー

くきゆるううう。

「…腹が減った」

むすつとした顔で、メリエルランスは呟いた。

近頃傍らに姿があるのが常となっている青年は、何故かそこに居ない。

「…むづ。勇者め、遅いではないか」

旅路には金と食料がいる。

そして彼らは、路銀はあったが、食物を持たなかった。

購入しようにも、現在地は鬱蒼とした森の中。

当然村や店、まして宿などあるわけがなく、買い物以前に野宿だった。

故に、金があっても使用不可能。

自力でどうにかするしかないと言うわけで。

「俺が何か食べれる物を探してくるから、お前はここから動くなよ」

「何い？命令するでない！誰がお前の言うことなど聞く——」

「…そうか、じゃあメルのご飯はそこに生えてる怪しげな斑模様のキノコで…」

「何をしておる！さっさと行くがいい！」

——という会話を交わして、ウィルが茂みの中に入っていったのは

かれこれ三時間前だ。

幸いにも今日の寢床は少し開けた場所で、天氣が崩れる様子もない。荷物番をしながらメリエルランスはウィルの帰りをずーっと待っていたのだけれど。

「…ええい、暇だ！」

草の上を転げ回ったり——木の幹に頭をぶつけて痛い目にあったり——、木の枝に登ってみたり——危うく降りられなくなるところだった——、その辺を走り回ったり——盛大に転けて擦り傷をこしらえたので、後で叱られるのではないかと実はびくびく——と、他にも色々して待ってみたが、一向にウィルが戻ってこない。

暇を持て余し痺れを切らしたメリエルランスは、空腹だし腹が立ったので、取り敢えずウィルの外套を下敷きにして横たわった。

思いがけず、それは感触が良かった。

「ぬ…」

あやつこないいい服を持っておったのか、とかなんとか呟きつつ、ごろりと寝返りを打つ。

視線の先は、ウィルが消えていった方角。

ひどく、静かだった。

他に人の気配など全くしない。

拗ねたような口調で、メリエルランスはぼつりと言った。

「…馬鹿者が…」

早く、帰ってこい。

何やら、香ばしい匂いがした。

ぱちりと大きな目を開いて自分が眠っていたことを知ったメリエルランスは、小さな手で眠い目を擦ってから、何度か瞬きを繰り返して、視界を透明にさせてから、きよろきよろと辺りを見渡す。

「おー、メル。起きたのか」

後ろを向くと、薪を持ったウィルがこちらに来ている。

すたすたと歩いて、ウィルはいつの間にか焚かれていた火に薪を足した。

先程の匂いはそこからしていたようだ。

くう、とお腹が抗議する音を聞いて、寝起きだったこともありぱかんとしていたメリエルランスは、はっと我に返り、

「お…遅かったではないか！貴様、私を此れ程待たすとは、なんと無神経な輩だ！」

憤慨する少女を余所に、勇者の青年は薪をいじりつつ生返事をした。

「はいはい、ごめんごめん」

いかにも適当な謝罪に、魔王様はぶつつんする。

「何だその言い方は！…貴様など、貴様など、丸焦げにしてやるー
！！」

小さな手を掲げる。

その周りでは、歪んだ空気が渦巻いていた。

「私を馬鹿にしたことを後悔するがいい！！」

何ともセオリー通りの悪役台詞を吐いて、勇者に向けて炎の魔術を

ぽひゅん。

「……………あれ？」

——食らわせられなかった。

一瞬だけ赤く灯った小さな火は、非常に情けない音を立てて不発に終わったのだ。

信じられない物を見る目で己の手を凝視するメリエルランス。

ウィルは、震えていた。

必死で溢れる感情を抑えようとして。

しかし、

「は…は、ははははは！！おま、お前…偉そうなこと言っというて失敗って、あはははは！！」

堪え切れずに腹を抱えて笑いだした。

メリエルランスは射殺するような眼差しでウィルを睨み付けた。

「笑うな！笑うなと言っておろうが！！」

叫び、ぽかぽかと両手でウィルを叩いても効果は無し。

その後も、ウィルは暫くの間笑い続けたのだった…。

むっすー。

そんな効果音が聞こえてきそうなほど、メリエルランスは立腹していた。

「メル、悪かったって」

ウィルが謝っても、少女はますます顔を背けるだけ。

愚か者が、私は今魔力が足りないだけだ、本来の身体であつたら、あつという間に消滅させてやるものを、今に見ておれ…などとぶつぶつ言いながら膝を抱えて意地でもウィルの方を向かない、という態度をとっているの、彼は嘆息した。

「…ほら」

メリエルランスの目の前に、焼いた茸や木の実などを差し出す。それはとても、食欲をそそる香りがした。

「う…」

ごくりと唾を飲み込む少女。

お腹は、物凄く空いていた。

しかしここで素直に受け取れば侮られるのは確実と葛藤している彼女に、ウィルは真面目な顔で、

「ごめんな？遅くなって」

「……」

メリエルランスはぷいとそっぽを向く。

やっぱり駄目かと思ったが、食物は奪われていった。

おや、と目を見張るウィルに背を向けながら、メリエルランスは言う。

「こ、今回は許してやろう。私は心が広いからな！だが、次はないぞ！」

そう言っで、貪るように食べ始める。
ウィルはくすりと笑って、

「…おーよしよし、寂しかったのか」

とメリエルランスの頭を撫でた。

当たり前に激昂した魔王少女が文句を言うが、口に物を詰めているせいで言葉は不明瞭。

それで、口に物を入れたまま話さない！とまたウィルに叱られることになり、釈然としないものを感じつつ、彼女は反省させられることになるのだった…。

彼らの旅は、まだまだつづく。

勇魔の小唄♪ばとる・つー（後書き）

みじかい。まあHPから持ってきただけなので。この二人の話はある意味一番ほのぼののしてると思っんですよね。個人的に気に入ってるペアなんです。文章改稿してません。

小姫君と従者の生活（現代 not 恋愛）

——世界は、ひどく醜いもので出来ているのだと思っていた。
小さな手が、それを否定するまでは。

両親は馬鹿な人間だった。

連帯保証人なんかになって人を信用したために、とんずらした他人の負債を被り、家族全員を貧困に追いやった。

その上、それを返済する前に事故で死んでしまった。

残されたのは、長女と長男……姉と俺の二人。

それに、親の保険金で返しきれなかった、赤の他人の多額の借金。たかたが高卒の女が一人と中卒の男一人に、出来ることなんて——限られていた。

だから、俺達は夜の世界に入った。

姉弟で頑張って働いたために、借金はなんとか返済することができた。

姉は数年前、夜から抜け出し、結婚までした。

——けれど俺は、未だ夜の仕事から足を洗っていない。

そろそろどうするか、身の振り方を考えなくてはいけないのに……二十六歳という年齢に達しながら、俺は何も将来について決めていなかった。

最近、姉とも連絡を取っていない。

「——じゃあ、美味しいカクテルを作りますよ。どうぞ、上がって下さい」

レディーファーストは勿論鉄則。

俺は店が用意した部屋に住んでいる。

貢ぎ物で貰うこともあったが、ややこしいことになりそうなので、毎回断っていた。

普段は寢床にしている此処にも、あまり客は入らせない。

だが今回は相手がしつこく、お得意様でもあったので無下にはできず、同伴で連れてこさせられたが……早々にお引き取り願うつもりだった。

しつこい女は嫌いだし、客を喰うような気分でも年でもないからだ。

——幸か不幸か、酒を飲ませる前に、追い出す口実が出来るとは思わずに。

いきなり、女が悲鳴をあげた。

何事かと玄関を覗いて、

「……は？」

俺は思いつきり素の顔で呟いていた。

おそらく、間抜け面をさらしていたと思う。

そこには、四つか五つくらいのおちまいガキ——もとい、女の子供がいて、きょとんと瞬きを繰り返していたのだ。

取り敢えず客の女を丸め込んで丁重にお帰り願った。

タクシーを捕まえて女を追いやると、部屋に戻る。

玄関のドアを閉じたら、再び子供と目があつた。

ふわふわの茶色い髪、光の加減で色彩が微妙に青にも黒にも変化して見える瞳。

十年もすれば、だれもが振り向く美少女になるだろうというその容貌。

……何というか。

恐ろしいまでに自分の小さい頃にそっくりな子供を前にして、力が抜けた。

——先程の客にも間違えられたので言っておくが、断じて俺の子ではない。そんなへまはしていないし、心当たりも………そんなにないいや、それ以前に、相手の正体を俺は知っていた。

前に会ったのは一度だけで、ずいぶん前のことなのだが——。

「……榎麻……？」

その子供の名前だと思われるものを記憶の片隅から引っ張りだして、口にした。

すると、愛らしい顔がぱあっと輝く。

「……りや？」

相手の身元が当たっていたことにほっとして、思わず頷こうとしたが……おい、ちょっと待て。

俺は屈んで、子供——榎麻と視線を合わせた。

「え・ま・ちゃん？何で俺を名前で呼び捨てにしてるのかなー？」

こんなちびに呼び捨てにされる理由はないぞ、おい。

榎麻は唇を尖らせた。

……いやまあ、可愛い仕草ではあったが、ほだされてはいかん、うん。

「……だって、ママがそうよびなさいって……」

——あのくそ女。

榎麻の母親——由香子^{ゆかこ}を思いっきり脳内でなじりつつ、俺は榎麻に問い掛ける。

「…俺のことはお兄ちゃんって呼ばうね？で、榎麻。そのママはどうしたのかなー？」

引き攣りかける頬をそこはプロ根性で正し、にこやかに笑いながら尋ねると、幼い少女は一通の手紙を差し出した。

味気のない普通の白い封筒を受け取って、中に目を通す。

そこには――、

『拝啓、理哉。

元氣？あんた最近顔も見せないで…って前置きはどーでもいいのよ』

おい、どうでもいいのか。

なら書くなよ。

『で、本題なんだけど、うち二人目が産まれるのよ。旦那の親もいないし、あたし一人でもやれることはやれるんだけど、旦那も榎麻も心配しててね』

あーそうかい。そりやおめでとさん。

……何で俺が関係あるんだ。

『そこで思い出したのがあんたよ。どうせ暇でしょ？』

暇じゃねえ。思いっきり暇じゃねえ！！

『ホストやってて暇じゃないとか言うんなら、しばき倒すわよ。いい機会だから、これを機に足洗うのね。あんた一応大検取って大学もイトコ出てんだから、探せば仕事はいくらでもあるでしょ』

知るか！

『…と、言うわけで、榎麻を一カ月よろしくね』

…何が「と、言うわけで」だ何がつ。

『寂しいけど、あんたどこに行きたがったのは榎麻だし。その子すっかりしてるから、逆に世話してくれるんじゃない？あーおかしい。想像するだけで笑えるわ』

ならアホな想像すんな。

『んじゃ、よろしく』

よろしくじゃねえ。

『追伸

榎麻にはあんたを名前で呼ぶように言い聞かせたから、変えさせようとしても無駄よ。じゃーね。

麗しのお姉さまより』

…誰がお姉さまだあのドグサレが！

思わずぐしゃりと手紙を握り潰していた。

続けて悪口雑言を口にしようとしたが、

「…りや…？」

小さな声に振り向くと、大きな目がじーっと見ていた。

「えま、きちゃだめだった？」

うつ……。

いかん、目を合わせるな。

ガキは意外と確信犯なんだ、自分の可愛さをわかってて利用してるんだ。

大体俺はガキが嫌いだし苦手だし、暇でもない！
だからきっぱり断るん、

「…りーや…？」

昔よく聞いたその呼び方に——幼い頃、母と姉が呼んでいた名前に——つい目を合わせてしまつて。

心なしか潤んでいるような目を見た瞬間……降参してしまつた。

「…いや、駄目じゃない」

ほとんど反射的にそう口にすると、目に見えて榎麻の雰囲気明るくなつた。

にこつと全開の笑みが見せられる。

「えへ、りーやつ」

きゆう、と小さな身体が片足に抱きついてきて、思わず可愛いと思つてしまつた俺は、自分に嘆息した。

……こうして、俺、逢坂理哉おつさかりやは、姉の由香子の娘——つまり俺の姪っ子である榎麻を一カ月という短いようで長い期間預かることになったのだつた……。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

どうやって部屋の中に入ったのか、と聞くと、きよとした榎麻は、鍵で開けて入ったと言った。

……ああそーか。そっぴや何年か前に、合鍵は姉貴に渡してたんだった。

何となくの行動だったのだが……今では後悔。

——引っ越し時かな、俺。

榎麻はいくつだったかと考えて、気付いた。

……今、夜中の一時じゃねーか。

大人でも寝る時間なのに、ガキが起きてちゃまずいだろ。

「……榎麻、いくつになったんだっけ？」

「みつつだよ。もうすぐよつつ！」

「……へえ」

寝なさい、と言ったはいいものの。

——他にベッドとかねーんだよここ……。

なるほどたしかに榎麻は出来た子だ。

着替えやら歯ブラシやらは自分で考えて持参したらしいし、パジャマのボタン掛けもちゃんと出来る——このくらいの年の子供ってたしかそういう細かい作業が苦手だったような——上、お礼や謝罪も

きちんとする。

……誰に似たんだ？間違いなく姉貴じゃねーな。
で、だ。

仕方なしに俺のキングサイズのベッドは広々としているから半分を
榎麻に譲ったのだが。

「……おい」

何時の間にやら俺の腕の中に擦り寄ってきている榎麻に呼び掛ける
が、返事はない。

寝息からして、熟睡しているようだ。

「……子犬じゃあるまいし」

呟いて、それがあまりに的を得ていることに気付いた。

ベッドに入るまではしゃいでいるようだったのに、枕に頭を付け
た瞬間、榎麻は寝入ってしまったし。いや、時間が時間だけに仕
方ないが。

……子犬って団子みたいに丸まって固まって寝るよな。

何気なくそのわんころの頭をくしゃりと撫でてやると、寝顔が嬉し
そうに綻んだ。

……やべー、可愛いかも。

今までガキを可愛いと思ったことなんてなかったんだが……。

「……寝よ」

深く考えないでおこうと、目を閉じた。

「…や、リーや、おきて」

ぺちぺち、と頬を何かが叩く——というより触れるに近かった——
感覚と呼ぶ声に、ふっと目を覚ました。昔の自分によく似た、しかしより女の子らしい小さな顔がドアップで映って、数秒固まった。

「リーや、おきたっ」

にこおっと笑うのは……ああそうだ、姪っ子の榎麻だ。

そうそう、昨日預かることになったんだ……。

「りや、ねちゃ、めっ」

ぺちぺちと再び頬が叩かれる。

……うるせーなあ。

ちらりと片目を開けて時計を確認。

……げ、まだ朝の七時じゃねーか。俺の出勤は夜の八時なんだから、まだ寝てていいんだよ。

俺はごろりと寝返りを打ち、榎麻に背を向けた。

「リーやーっ」

ぺちぺちぺちぺち。

反対側に回り、尚もちびっこは頬を叩きまくるが、痛くもなんともない。

無視無視。

ほっときゃ諦めるだろ。

「リーやあ？」

ちよっとむすくれたような声がして、諦めるかな、と半分夢の世界に旅立っていると。

「…えいつ」

……ちよ、なんかもぞもぞする…ってえ！

「あははははははは！」

「おーきーてーっ」

こしよこしよこしよこしよ！

「くっすぐって…やめ、や…はははっ！」

「おきて、りや！」

脇腹をくすぐられて、身悶えした。

やめっ…俺そこ弱いんだよ……！

「っはははっ…っこのっ！」

「わあ！」

散々俺をいじってくれた小悪魔を押さえこんだ。すると、榎麻は目をぱちくりさせている。

……まったく、俺の睡眠時間を削りやがってこのちびは。

「えーまー？よくもくすぐってくれたなあ？」

「…りやがおきないからだもん！」

お、口答えした。

見かけによらず意志は強いらしい。

……まあ、あの姉の子だから当たり前か。

「ふーん、そつか、じゃあ…俺もくすぐってやる!」

榎麻の脇っ腹と足の裏をくすぐる。
と、ちび娘は笑いながら暴れた。

「きゃはははっ!くすぐりたい、きゃははははは!」

…何か、喜んでないか?そっぴやガキはくすぐられるのが好きだった。

「…やれやれ」

一通り復讐をすると、すっかり目が覚めてしまったので、ベッドから降りる。

着替えるか…って。

おい、わんこ。何じつと見てんだよ……。

「りや、まだあ?」

「…今行く」

寢室から追い出すと、榎麻は廊下で待っていたらしく、のろのろ着替えをする俺に痺れを切らして呼んできた。

ため息をつきながらドアを開けると、廊下の壁に寄り掛かっていた榎麻が身を起こした。

「りや!ごはん!」

…ああそーだよ、飯食わせなきゃいけねーんだった。

まったくガキはめんどくせ、

「
:
オイ
」

キッチンに足を踏み入れた俺は、顔を引きつらせた。

皿の上に置かれた二枚ずつのトースト、並べられたバターとジャム。コーヒーの香り漂うそこに、俺は呆然とした。

「——もしかして、お前がやったのか……？」

尋ねると、榎麻はかなりの身長差のせいかほとんど真上に顔を向けて俺を見て、笑った。

「うんっ。ひはつかっちゃだめっていわれてるからつかってないけど、とーすといんすたんとこーひーはままにもつくってあげてるの。ままが、りやはあさこーひーのまないといけないから、つくってあげなさいって」

あの女は若い娘に何を仕込んでんだ、何を！

今頃は高笑いしているであろう姉の教育方針に呆れつつ、榎麻に、苦勞してんなお前も、と髪をくしゃくしゃにしてやると、一瞬ほけつとしたが榎麻は、すぐに破顔した。

「りーや、ごはんたべよう」

「ああ」

トースターとポットがあつたから榎麻にも作れたらしいそれらを口にする、少し冷めているものの、味はまずまずだった。

俺が湯をいつも沸かしてる人間でよかった……

自分でやかんでも使って沸かしかねない、このちび……。

ひやりとした俺は、未恐ろしい姪の将来を案じつつ、適当にスクランブルエッグでも作って——何故かちょこまかと動きちびも手伝った——榎麻に食べさせ、朝食を終えた。

軽くぼさぼさになっている榎麻の髪に気付いて、仕方ないと櫛で解いてやりながら——ホストの性分か？綺麗な髪なんだからもったいなくてつい——聞いた。

「そうだ榎麻。お前、保育園だか幼稚園だかに行ってるんじゃないのか？」

素朴な疑問だった。

「ママが、おやすみしなさいって」

…おいおい。一月もかよ。

「…お前は行かなくて平気なのか？」

「ちよつとさみしいけど、りやというほうがいい！」

……一日も経ってないくせに、何言ってるんだかこのお子様は。

嘆息しつつも、もう榎麻を迷惑だとそこまで思っていないことに気付いて驚いた。

榎麻を見ると、満面の笑顔をくれる。

……ガキなんか、嫌いだったんだけどな…。

——ちなみに、榎麻はほとんど我儘を言わない。

姉貴、あんたは反面教師か……？

それから暫く、幼い少女と青年の生活は続くのだった。

小姫君と従者の生活（現代not恋愛）（後書き）

これもHPより。

叔父と姪のほのぼのが書きたくて。

将来的にすごい過保護になればいいと思う。

双翼の祈り（天使、兄妹愛、シリアス）

——灼かれるようなこの痛みも、貴方が存在している証と思えば、耐えられた。

光に満ちた天の果て。

純白の翼を持った神の子らが集うその地は、地上の人々に『天国』と呼ばれる場所。

そこでは、神の使者となるべく、幼体の時分から、翼もつ者達——『天使』と呼称される者達が、日々修行に勤しんでいた。

「チエル！」

鮮やかな緑萌ゆる庭園のベンチに腰掛けていた少年は、愛称を呼ばれて、さらりと金色の髪を揺らしながら振り向いた。

腰の辺りまである長い金髪に光を弾いてこちらへ走って来るのは、自分と同じ顔をした少女。

「…やあ、マリス」

チエルムは、春の木漏れ日のように柔らかな笑みを浮かべる。

兄のその微笑みを見て、マリスは顔を輝かせた。

「今日は調子が良いの？」

「うん、これ以上はないってくらいね」

それを聞いて、マリスの大きな瞳が嬉しげに輝きを増す。

全身から喜びの雰囲気振りまいている様が微笑ましくて、くすとチエルムは笑い声を零した。
むっと頬を膨らませ、マリスは腰に手を当てて憤慨してみせる。

「何で笑うの？せつかく体調が良いなら、一緒にお散歩しようと思っただけなのに！」

「ごめんごめん。元気だなあ、と思って」

「…何か癪に障るなあ、その言い方」

「——ごめんって。散歩、行こう？」

困ったような笑みを浮かべた兄は、妹に手を差し伸べた。

拗ねていたマリスだったが、兄の笑顔にほだされ、意地を張るのを諦めて、その手を取った。

仲良く歩く二人の後ろから、柔らかな風が薫る。

穏やかで平凡な幸せは、ずっと、続いていくと思っていた。

金髪碧眼の幼い双子の天使のことは、天界でもよく知られていた。

一つは、双子の存在が珍しく、更にまだ幼いというのに、二人が強い聖性を秘めていたために。

愛らしい男女の双子の、兄の名はチエルム。妹の名は、マリスといった。

彼らが知られている理由のもう一つは、あまり喜ばしいことではなく——悲哀を覚えるようなこと。

彼らの住まう白亜の建物の一角は、時折騒がしくなる。部屋中を包む緊迫感がおさまるまでは、長い時間を要することが多い。

医療に携わる天使達が入れ替わり立ち替わり、一つの部屋で忙しそくに作業をする為だ。

施術を施されているのは自分の半身で、マリスはいつも、隣で手を握っていることしかできなかった。

苦しそうにもがく兄の姿をまざまざと見せつけられる。

——何度、代わってやりたいと思っただろう。

双子の内、兄は病魔に蝕まれ、方や妹は健やかに育っていく。

こうして繋いでいる手から、彼を苦しめる原因が、自分に移ればいいのにと…何度願ったことだろう。

マリスは、何も出来ない自分が、不甲斐なかった。

看病は徹夜になることも多々あり、いつの間にか眠ってしまうことがある。そんな怒濤の一夜が明けた後は、誰かの手が優しく頭を撫でる感覚で目を覚ます。

ぱつと顔をあげれば、おはよう、と穏やかに微笑む兄の姿に安堵して、いつも泣きたくなってしまふのだ。

——神様、神様。どうか、兄をお助けください…。

下級の天使は神の御前に罷り出ることが許されていなかったのので、彼女は神殿の入り口で毎日祈りを捧げていた。

上級の天使になれば、神に直接進言することも出来るようになる。

兄の為に己の聖性を磨きながら、マリスは兄の病気が治りますように、と祈ることしか出来なかった。

そんな無垢なる願いを嘲笑うかのように、日に日に、兄の病状は悪化していく。

「——神様っ！」

チエルムの意識が三日戻らなかったある日、マリスは声に出して祈った。

どうして神はたった一つの願いを聞き入れてくれないのだろうと思しながら。

三日の間昏倒していた兄は、目が覚めるなり、ずっと付き添っていた自分の心配ばかりしていた。

——あんなに優しい兄を、何故、神は救ってくれないのか。
マリスは思わず、神に不信と疑問を抱いてしまった。

…その疑問こそ、闇の付け入る隙だとも知らずに。

「——カミサマには、兄貴の病気の原因を取り除けないからだ」
「…っ!？」

ぎよつと振り向いたマリスの目に、邪悪な闇が映った。

「あ…悪魔っ!？」

驚愕して、マリスは後退る。
黒い髪に紅い邪眼。

——闇よりも濃い闇を宿す、蝙蝠の羽に似た背中 of 皮膚。
空気が歪む程に禍々しい美しさを持つ魔性は、にたりと嗤った。

「ど、どうしてここに…」

この場に在るはずのない存在に、ひどく戸惑い……恐怖を感じた。
悪魔は、己の住処である魔界に居て、神聖な空気に満ちたこの地には侵入できないはず。

それも、相手はかなり力のある悪魔のようだ。

マリスの本能が、逃げ出せと訴える。

けれど——身体が、動かない。

「お前の兄貴を蝕むもののおかげで、俺は此処にいられるのさ」
「…え？」

「——チビ。お前達天使が必死に守護してる人間は今、天界も人間界も魔界も穢すような空気を作り続けている。それが全ての原因だ」

「そんなはず…っ」

「じゃあ何で天使が病気になるんだ？神の使いなのに。何で俺が此処にいられるんだ？全て、人間が醜い争いの果てに吐き出した歪みが、世界を汚す瘴気を生んだせいだよ」

「…！」

嘘だ。

悪魔は嘘を吐くものだ。人も天使も、それに騙されてはいけない。わかっているのに、聞いてはいけないと思うのに——何故か、耳を塞げない。

「人間界で溢れた瘴気は天界や魔界にまで押し寄せた。瘴気で此処の神気も大分薄れたから、俺のような上位の悪魔はもう結界内に入っただけ。地上の空気さえ生身では障りが出るのに、瘴気が天界に入りこんでいたら、天使には耐えられないな」

「そ…んな…」

「地上の人間は神なんて信じちゃいない。目先の欲望にしか目がいかないんだから。——嘘だと思うか？」

「じゃあ…チエルの、病気は…っ！」

「そう。チビの兄貴は、瘴気に蝕まれてるんだよ」

「——っ！」

「カミサマに祈ったって無駄なことだ。ヒトの作った瘴気はカミサマすら穢すから、手の出し様がない」

「そんな…ことって…」

嘘だと思いたい。

けれど、それが嘘なのだとしたら——何故、神は何もしてくれない？天使は『絶望』という感情を知らない。

彼らは、何より清らかな心で在ることが求められるから。

…その瞬間、マリスの心には闇が漂った。

「うそ…」

侵食する。

暗い影が——光を。

「…チビの兄貴、もう長くないな」

「嘘…っ！」

「ここの所容態が良くないだろう？穢れに耐性の無い天使の幼体のことだ、あと一回、発作でも来たら——消えるな」

「——っ！」

聞いてはいけない。

平気な顔で偽りを騙る悪魔の言葉など、耳にしてはいけないと…思うのに。

それが真実であれば、全てつじつまが合うのだ。

…本当に、これは嘘？

ぐらり、と幼い天使の心は揺れた。

そこへ更に、悪魔は追い討ちをかける。

「天使は、人間と違って役目を全うするまで転生出来ないから…どうなるだろうな？消滅してしまうかもな…『お兄ちゃん』は」

——決定打だった。

消える？

消えてしまう…あの、笑顔が。

あの——温もりが。

この世界の、どこからも。

「や…やだ…っ！やだあっ！！」

ぼろ、と透明な雫が少女の瞳から零れ落ちる。
どんと涙の量は増えていき——マリスは、泣き叫んだ。

「神様…っ！神様、助けて神様…っ！——誰か、チエルムを助けて…っ！」

半身が消え失せるなど、想像しただけで背筋が凍る。
そこには何もなく、ただ空虚な闇だけが在るだろう。

以前、チエルムと同じようにして、消えてしまった天使がいた。人の死とは違い、天使はまさにその存在が消えうせる。
嫌だ。

自分から兄を奪わないで…！

——絶望の淵に天使の雛が立った瞬間。

「…助けてやろうか？」

悪魔は、にたりと嗤って、その牙を剥いた。

ふ、とチエルムは目を覚ました。

己の内を喰い破るかのような激痛を与えてくる病魔が、今も尚息づいているのを感じる。

だが——耐えられない程ではない。これしきの痛みなど。
自分の身体の中のことなど、自分が一番よくわかつている。
もうあまり、時間が無いことも。

病気のせいかな、彼の翼はとても小さかった。

通常の天使や妹の翼と比べると、半分以下の大きさしかないのだ。これでは飛ぶことも出来ない。

——飛べない天使など、天使と言えようか。前々から、もう、楽になりたいと何度も思っていた。

激痛に、飛べぬ屈辱に耐えながら、それでも生きていたいと執着する理由はただひとつ。

——大切な、片割れがいるからだ。

寝台に横たわったまま、チエルムは妹のことを想った。

消滅は、常に身近に在ったから、それに対しては、今ではもう麻痺しているような意識しかない。

一番重く感じるのは、妹を哀しませているという罪悪感。

小さく息を吐いたその時。

——ふと、違和感を感じた。

「……マリス——マリー？」

いつもなら傍らにいる妹の姿がない。ここにいないだけでなく、何故か、この付近から気配を感じ取れない。

何かが変だ、と眉を寄せた瞬間、嘘のように、息苦しさが消えた。

「……え？」

一時的に苦痛が落ち着いたというのではなく、病魔そのものがなくなっただけのような、解放感を感じる。

驚く彼の背中には——大きく立派な、純白の翼が顕在していたのだ。つた。

『助けてやろうか？』

たとえ相手が悪魔であろうと、その言葉が、ただひとつの救いだっ
た。

「…助けて」

白き者を闇に染め上げた時ほど、愉悦を覚えることはない、と悪魔
は思う。

極上の聖性を湛える碧眼に暗い翳りを落とし、助けを乞うあどけな
い天使のその絶望の表情こそが、彼の糧となる。

「兄の痛みを引き受ける覚悟は？」

「…ある」

「では——堕ちる覚悟は？」

堕天——。

マリスは僅かに目を見開いたが、すぐに、決意を秘めた瞳で頷いた。
悪魔は愉快そうに目を細める。

「では、対価として…その瞳をひとつ、頂くが？」

「——瞳？」

「ああ。それほど見事な聖性に満ちた瞳は珍しい。まして碧玉なら
ば、この上ない装飾になるからな」

「……あげる。チェルを助けてくれるなら——両方あげたっていい」

マリスのその言葉に、悪魔は、くつと晒う。

悪魔の言動はより乱雑になり、残酷な本性が垣間見えていた。

それに気付かぬ位、必死な天使の雛。

いつそ喰らってやろうかと思う程、マリスの姿は嗜虐心を煽った。

「見上げた兄妹愛だ。…だが俺は優しいから、一つは残してやろう」

マリスは、何の感慨も無く、ただ首を縦に振る。

「――契約、成立」

「――っ！」

悪魔がそう囁いて嘲笑った時、少女の身体を――激痛が貫いた。

「かはっ…！！」

「兄の痛みを――瘡気をお前が引き受ける。その身は闇に堕ち、左の眼は光を喪う」

身体の内側から、何かが己を食い破ろうとしているのではないかと
思う程の痛みがした。

「あ…あぐっ…っ！」

「代わりに、兄には健やかな身体を」

闇が蠢いた。

背中の真白き翼が、根元から黒く染められていく。

身体の中を何かが這いずり回っているかのような不快感、底知れぬ
恐怖、気が遠くなる程の苦痛――。

……これに、兄は耐えていたのだ。

どれ程痛かったろう、苦しかったろう。いつだって、そんなことを
悟らせないように、彼は優しく笑っていた。

そう考えただけで、身体だけでなく、心までもが痛みを訴える。

「うあ…ああっ…！！」

「…漆黒に染まって尚、美しい翼、か…」

ぼそりと皮肉げに悪魔が呟いた。

それを知覚出来る程の余裕は、責め苛む痛み支配されたマリスにはなかった。

——彼女の背中の翼は、鮮やかな漆黒に染め抜かれていた。

「直に、その痛みも薄れるさ。天使とは違って、悪魔は瘡気に慣れることが出来るから、それ程苦痛じゃなくなる」

悪魔は笑った。

「さあ、その眼を貰おう」

灼熱の焰に巻かれているような痛みがした。

右眼に感じる喪失感、激痛——。

後のことは、よく覚えていない。

チエルムは、病魔の消えた身体に戸惑いながら、天界のあちこちを彷徨っていた。

妹が——マリスが行方知れずになってから、二日が経つ。

彼は、自分に起きた出来事に、奇跡だと皆が驚嘆するのがおかしいと思っていた。

きっと…奇跡なんかじゃない。

妹が姿を消したのと同時期に、自分が健康になったなど…偶然がすぎる。

何か、あつたに違いない。

胸の辺りに奇妙な焦燥感が渦巻いている。

嫌な予感が、いつまでも消えない——。

探して、探して。

あらゆる所を回ったのに、妹は見つからない。

一体何処に行ったんだ、と一度自宅へ戻ったその晩。

「…マリス？」

ふと誰かの気配を感じて、目を覚ました。

「…チエルム」

少し離れた場所に立っているのは間違いなく、マリスだった。

外套のようなもので頭から全身を覆い隠しており、かろうじて、碧い左目と金色の前髪だけが見える。

「マリーー！！何処に行つて…」

「——チエル。お別れを…言いに来たの」

静かに囁かれた言葉に、耳を疑う。

「…え？」

「あのね…それで、お願いがあつて」

マリスは外套の隙間から腕を出した。

その左手首と右腕上腕には、薄紅色の、特殊な布製の輪が填められている。

地上の人間には、リストバンドと呼ばれるらしいそれは、いつだったか、地上の任務より戻った上司から貰ったものだった。

マリスは薄紅色、チエルムは銀色と、二人で色違いのお揃いなのだ。マリスもチエルムも、毎日身に付けている。

「これ…交換、してくれない？」

「……？」

「片方、私のとチエルのを、交換して欲しいんだ」

唐突な言葉に、戸惑いを隠せない。

いつもなら、特に理由を訊かずとも、笑って快諾していただろう。けれど今は、自分が知らない所で何が起こったのかさっぱりわからず、嫌な予感が彼を苛んでいた。

「……何で、いきなりそんなことを？」

「……」

「……今まで、何処に居たの」

「……」

「答えなよ！」

黙ったままのマリスに、チエルムは珍しく怒った。

温厚な彼が怒りを露にすることは珍しく、声を荒げるのも稀だった。しかし今は、正体のわからぬ恐怖と不安に満ちているためか、常よりも気性が激しくなっていたのだ。

「——チエルム。私ね、天使失格なんだ」

「……は……？」

またもや突然の言葉に、呆氣に取られる。

「神様に仕える資格もないの。だって——」

マリスは悲しそうに微笑んだ。

「チエルの病気が人間のせいだって知った時、人間なんか滅びればいいと思ったの」

「……！」

「今でもね、赦せないし、憎んでる。——人々の幸福と安寧を願い、見守るのが私達の使命なのに、ね」

「…マリス…」

「だから、私はもう、天使じゃない。気付いてると思うけど…」

ゆつくりと、マリスは纏っていた外套を脱いだ。

罪を覆い隠すかのような暗い色の布の下から現れたのは、予想もしていなかったものだった。

「…マリー…！」

目を、見張る。

いつも見ていた背中の中は、闇のように漆黒に染まっていたから。そして何故か、片目は黒い眼帯に覆われていた。

「私は、天使じゃなくなっちゃった。それならこの翼は、チエルにあげようと思ったの」

「ば、」

「チエルの病気を治して、立派な翼をチエルにあげるって言うてくれたひとがいたから、頼んだの」

「——それで、その目が…！？」

チエルは聡明だった為に、そこまでくればすぐにわかった。

妹が——何と、契約を交わしたのか。

何を、引き替えにしたのか。

「どうして…どうして悪魔なんかと…！」

「…チエル」

「僕のため！？それなら、こんな翼はいらなかった！病気が治らなくたってよかった！僕は――」

「チエルのためなんかじゃない！！」

「――な、」

「私のため！全部全部、私自身のためだもの！」

マリスは脱いだ外套を、再び被った。

兄の目に、罪を映すまいと。

「チエルがこのままだと、消滅しちゃうことなんてわかってた！ずっと、奇跡が起こるかもしれないって、祈ってた！」

「……マリー」

「でも！……もう時間が無かった。私は、神様を信じられなかった――そして、天使である資格を失った」

「そんなことない！」

「うっん、自分でよくわかってるの。……私はね、チエル」

ひとと兄を見据えた片方だけの翡翠の瞳は、とてもとても、美しかった。

「――チエルがいなくなることが、嫌だった。例え神様の御元にチエルが還るだけだとしても……神様にだって、チエルを取られなくなかったの。……私欲に、走ったんだよ」

だからもう、自分は本当に、天使ではなかったのだ、とマリスは呟いた。

「此処にはいられなかった。だからこそ、堕ちたの」

「……そんな……」

「見つかったら大変だから、もう行かなくちゃならない。……その前

に、どうしてもチエルムに会っていきたくった」

ごめんね、とマリスは言った。

「…マリスが謝る理由なんて、ないよ」

自分をもっと強ければ、病気になどならなければ、マリスを悲しませることがなければ——こんなことには、ならなかった。

「…神様に懺悔をすれば、もしかしたら、翼を返してくださるかもしれない——でも、嫌なんだね？」

「…うん」

「…行くんだ？」

「……うん」

「……そう」

チエルムは、俯いた。

自分に、妹を止める力は無い。

何故、こんなにも無力なのだろう——。

「…交換、しよう」

「え？」

チエルムは、左手首から銀の輪を引き抜いた。
掌に乗せて、マリスへと差し出す。

「ほら。マリーも」

「あ、うん……」

マリスも、薄紅色の輪を取った。

それをチエルムに渡しながら、彼のリストバンドを受け取る。
手首に填めた瞬間——チエルムは、マリスの左手を握った。

「チエル？」

「——いついかなる時も、君が無事でありますように」

それは、祈り。

「……どうか、幸せでありますように」

それは、願い。

「どんなに離れていても、心は側に在るから——」

……それは、誓い。

「いつか……いつかきつと、また逢えるのを、待ってる」

きつと、どれ程離れようと、どれ程時間が経とうとも、二人の仲は
変わらない。

目に見える形として、これが僕らを繋いでくれる。
ずっと、待っているから——。

「——っ」

ぼろ、と一つになった翡翠の眼から、涙が零れ落ちた。
悲しませて、ごめんなさい。

勝手な真似をして、置いて行って、ごめんなさい。
自分を責めさせて、ごめんなさい——。

言いたいことは、謝りたいことは、たくさんあったけれど。

「チエル…！」

どちらからともなく、抱き締め合った。

これが最後の抱擁になると、どちらもわかっていたから。悪魔と天使は、触れ合うことは出来ないと聞いていた。ならばきつと、この時の温もりは、奇跡だったのだ――。

「ありがとう…ありがとう、チエル」

「…うん」

「…大好き」

「うん、僕も」

「双子の片割れが…チエルで、よかった」

「……僕も…マリスでよかったと思ってるよ」

行きたくない、と思った。

離れたくない――そう思わないはずがない。けれど、行かなければならないから。

言い残すことが無いようにしなければ。

「…マリスは知ってた？このリストバンドの裏。僕達にとっては、物凄く正しいことが刻まれているんだよ」

「え…？し、知らない」

「そっか。じゃあ…向こうに行ってから、見てみて。ここでは駄目だよ」

「…どうして？」

「だって、せっかく泣き止んできたのに…また泣いちゃいそうだから」

そう言われて、涙が止まっていたことに気付いた。

意味深な台詞に気を取られて、顔一杯に疑問符を浮かべたのを見て取ったチエルムは、苦笑した。

「あとで。…今は、笑っていてほしいんだ」

「……うん」

そうだね。笑顔がみたい。

大切な人にはいつだって、笑顔でいてほしい。

だからきつとチエルムは、いつも笑顔なんだ――。

双子だから、わかる。

本当は彼が、とても苦しくて悲しい思いをしていること。

それでも泣かないのは…笑顔でいるのは、私を悲しませない為だと。

それがチエルムの強さで、兄らしさを感じさせる所。

私が、一番好きな所。

「…さよならは、言わないよ」

チエルムはそう言つて、笑った。

マリスの大好きな笑顔で。

「――行つてらっしゃい。…またね」

また泣きそうになったけれど、必死で堪えた。

そして、兄の為に、笑顔を作る。

不自然にならないようにと浮かべた笑顔で、言った。

「行つてきます――また、ね」

身体が、手が、離れる。

魂を引き裂かれるような思いがした。

今は黒く染まった翼を広げて、窓から出る。

最後に交わした笑顔は、二人の記憶に強く強く残った。

姿が見えなくなった後も、チエルムはずっと、窓辺から、妹が行ってしまっただ方角を見つめていた。

「……マリー……」

きっと、もう二度と、顔を向き合わせて彼女の名を呼べる日は来ない。

……本当は、平静でなんていらなかった。

生まれた時からずっと傍に居た片割れを失ったというのに、平気なはずがない。

けれど彼女は、きっと泣き顔なんて、見たくないだろうと思ったから――。

「……もう、いい、かな……？」

もう、泣いてもいいですか。

誰にともなく問い掛けた後、チエルムは嗚咽を漏らした。

我慢していた分、止めどなく溢れた涙は、暫くの間、留まることが無かった。

…触れていた温もりは、此処には無い。

天界を出て、地上に降りながら、マリスは己の手を見つめていた。消えた温かさが、既に恋しかったから。

ふと、リストバンドについて思い出して、チエルムからもらった銀の輪を裏返す。

その途端、目に飛び込んできた文字に、マリスは、チエルムの言葉通り涙を浮かべた。

ウインクルム
『Vinculum』

その意味は——『絆』——。

『どれ程離れても、僕らは繋がっているから』

…この布が、私たちを繋いでいる。

心を入れ替えるように、手首の銀色に口付けを一つ落とすと、長い髪を二つに結わえた。

己を自戒するかの如く、髪を結ぶリボンは緋色。

これから彼女は、『堕ちた天使』として生きていくのだ。

——翡翠の瞳は、驚く程澄んでいた。

闇に堕ちたというのに、その眼は輝きを喪わない。

それはとても、神聖なものを宿していた。

…すぐに頭を切り替えられる程、器用じゃない。

だから…今だけは、純粹に、兄を、天界を想っていてもいいだろう。もう、手を伸ばしても、届かない所に在るのだから…。

何処に居ても。

何をしていても。

きっと——二人の願いは同じ。

黒と白の双つの翼が、祈ることはただひとつ。

どうか、君が——幸せでありますように。

空の彼方と地の果てで、彼らはお互いを想う。
かけがえなき、対の存在を。

何者も、彼らの絆を裂くことは出来ない。
それが、双翼の一番の誇りだった。

叶わないかもしれないけれど。

いつかまた——巡り合うその日まで。

片割れの無事を願おう。

他には何も、望まない。

双翼の祈り（天使、兄妹愛、シリアス）（後書き）

リストバンド云々は事情があるのですがお気になさらず。昔頂いたイラストから作った話だったので、それに合わせる為にああなりました。

天使の男女の双子のお話でした。ここに載せてもいいのかなと思っただんですけどまあいいかと。この話があるので残酷表現の項目を追加しました。

消毒屋（現代FT？not恋愛）

——その疼く傷痕に、つける薬はありますか？

「——さん、市橋さん」

誰かの泣き声が聴こえた気がした。

……でも、いい。もういい。

生き抜く気力なんて、もう、無い。

「市橋沙耶さん？」

ぽん、と肩を叩かれ、市橋沙耶は驚いてびくりと僅かに椅子から飛びあがった。

「…っ！」

振り向くと、滑らかな肌に表情の乏しさが目立つ、端正な顔立ちをした茶髪の女性が一人。

「診察の準備ができました。先生がお待ちですので、そちらにお入りになってください」

マニキュアなど施されていなくても健康的な薄い桃色の爪が光る、細く長い指で示されたのは、白いカーテンが入口に掛かった一つの

部屋。

上の方には『診察室』と書かれたプレートが見えた。

「え…あの」

困惑したが、相手はもう奥の方へ歩いて行ってしまった。

「え…」

きよろきよろと見渡せば、沙耶がいるのは病院の待合室のようだった。

あまり大きくはなく、小綺麗にはしてあるものの、診療所といった所か。

勿論、知らない場所だ。こんな所に来た覚えはない。

沙耶は呆然とした。

声を掛けられるまでの記憶が、ひどく曖昧なのだ。

ただ、病院に用がなかったことは確かで、当然ながら受け付けを済ませたはずもない。

それなのに何故か自分の名前は知られていて、診察を受けることになっている。

どうすればよいのかと途方に暮れたが、目は自然と診察室へと向いた。

風が吹いたのか、ふわりとカーテンが揺れる。

——それはまるで、沙耶を招いているように見えた。

「……」

惹かれ、誘われるように、どこか夢見心地のまま、沙耶は足を踏み出していた。

カーテンを捲り中を窺うと、診察室には、机に向かう形で椅子に座っている一人の青年がいた。

白衣を着ていることから、医者だろうと窺える。沙耶に気付いて、医師は顔をあげた。

色素の薄い長めの髪を一つに結び、細い銀縁の眼鏡を掛けている、整った容姿の青年医師は、沙耶を見て微笑んだ。

「ああ、市橋さん。お待ちせしました。どうぞ掛けてください」

「あ……」

椅子を勧められ、躊躇いつつも頷こうとしたその瞬間、

「うわっ!？」

「……!？」

ひゅん、と顔の横を何かが飛んでいった。

沙耶はそろそろと、ぎこちなくそちらに視線をやり、壁に垂直に突き刺さった注射器を目にして青ざめる。

「ま、まどか円くん!?!何てことを!」

医師が慌てて非難したのは、注射器が飛んできた方角に立っていた女性――先程、沙耶に声を掛けた人だった。

「円くん!危ないじゃないか!」

医師が詰問すると、円というらしい女性はついとわざとらしく視線をそらし、

「…すみません、手が滑りました」

少しも悪いと思っていない様子で、淡々と嘯いた。

「嘘だ！今の間は何！？いや、例え本当だったとしても、市橋さんに当たっていたらどうするつもりだったんだい！？」

「ああ…すみません、市橋さん。怪我はありませんでしたか？」

円は、それまでのしれっととぼけた顔が嘘だったかのように、沙耶に対して爽やかに微笑みかけると、無事を問う。

「は、え…はい」

怯えていたはずが、同性でも思わず見惚れてしまうような笑顔に、知らず知らずの内に警戒が薄れていた。

こくこくと頷く沙耶へもう一度にこりと笑って——円は医師に視線を戻す。

その顔からは、瞬時に表情が消えていた。

「……」

見事なまでのその変わり様にぽかんとした沙耶を置いて、医師と女性の会話は進む。

「先生、避けたら駄目じゃないですか。医者なら、盾になっても患者を守らなくては」

淡々と抑揚なく述べられる台詞は、論理的なようだが全く筋が通っていない。

「ああ、まあそうだね……って、そもそも君が注射器なんて投げるからだろ！？僕を殺す気かい！？」

「…人聞きの悪い。ちよつと怪我をするくらいでしょう。当り所が悪ければ、せいぜい息の根が止まるくらいで…」

「イコール死つてことじゃないか！…いや、その前に、やっぱりわざと投げたんだね！？」

「…ちつ」

「円くんっ！？」

「——先生、五月蠅いですよ。患者さんを待たせてはいけません」

「君が今更正論を言うのかい！？…ああ、もういいや…」どつと疲れた様子で、がっくりと肩を落とした医師は、椅子の背もたれに沈みこんだ。

対して、円は涼しい顔をしている。無表情ながらもことなく生き生きとしているのは気のせいか。

びくびくしていた沙耶は、一段落したらしいそこで二人を見比べ、ようやくある事を認識した。

円は看護師の制服ではなく、白衣を羽織っていたのだ。

てつきり、最初に対応したのが彼女であつたし、医師を「先生」と呼んでいたことから、看護師なのだと思っていた。

診察室に招かれた時は、ぼんやりとしていたために、相手の服装をよく見ていなかったのだ。

…つまり、彼女も医者なのだろうか？

では看護師は何処に、と考えて。

「…え…？」

思わず、声が漏れた。

——おかしい。

此処が何科かは知らないが、普通病院では、咳の音や話し声や人が移動する際の衣擦れの音など、何らかの物音が聞こえるはずだ。そういえば、待合室には他に誰もいなかった気がする。患者の気配が一切しない上、看護師がいる様子もない。あまり繁盛していないにしてもおかし過ぎる。

——ここにいる三人以外、他に人の気配がしないのだ。

困惑する沙耶を見て、意気消沈していたはずの医師は薄く笑うと、身体を起こした。

殆ど音をたてずに背もたれを回し、椅子ごと沙耶に正面から向かい合う。

「——では、診察を始めましょう。…その前に、自己紹介を」

にこりと笑った医師には、少し前のどこか情けない雰囲気など欠片もなく、彼は、却って底の見えない余裕を漂わせていた。

「僕の名前は、月詠生つぐよみせいといいます。ここ、月詠診療所の所長兼担当医師です」

「…はあ…」

「そちらの彼女は薬剤師兼看護師の——」

「助手」

「…はいはい。助手の相模さがみ円さんです」

冷ややかに口を挟まれ、医師…生は苦笑しながら続けた。

円がふ、と笑って頭を少し下げたので、沙耶も慌てて一礼する。

すると、円が何かのファイルを手に行っているのが見えた。

普通だったらカルテだと思うが、何故かはわからないが沙耶は此処に初めて来ているのだから、問診もしていない——それは間違いないだろう——のに、今から作るならまだしも、既にカルテがあるはずがないのだ。

当惑しながら、次は自分の自己紹介の番だとはっと気付き、

「…あの、私は…」

「——市橋沙耶さん。十七歳、O型。誕生日は八月十六日。目立つ病歴は特になし。両親共に健在」

すらすらと読み上げる円に、沙耶は息を飲んだ。

円は手にしたファイルに目を落としている。

それに、沙耶の何もかもが書かれているかのように、よどみなく。そのファイルが……以前から作られていたカルテ、その物であるように。

「…十二歳年の離れた弟が、一人」

その条項が言葉にされた瞬間、沙耶は身体を固くした。
耳の奥で、弾むような元気な声が響く。

『おねえちゃんっ』

いつだって、向日葵みたいに明るかった子。

「一カ月前、自動車事故に遭い、貴方が助けようとしたが」

どくん、と心臓が跳ねた。

——やめて。嫌だ、聞きたくない……！

「…市橋陽太、五歳は打ち所が悪く、死亡した」

相変わらず淡々とした声が紡いだ事實は、沙耶の胸を撃ち抜いた。
世界が一瞬にして色褪せる。

勝手に脳が再生する記憶は、苦し気に伸ばされる幼い手。

『おねえ、ちゃ……』

——陽太。

「……っ!」

低くなつていく体温、流れ出る血——か細い息。

握り締めた小さな手のひらは、だんだんと冷たくなっていった。

自分に何が起こったかわからず、怖かっただろくに、泣き叫ぶ私に、弟は小さく微笑んで、名を呼んで見せた。

それが、最期だった。

……まだ、ほんの子供だったのに。

初めて出来た兄弟。

歳が大分離れていた分、可愛くて仕方なかった。

生まれた時からずっと一緒にいたと言っても過言ではなく、あの子はいつも自分を慕って後を付いて来ていた。

「……陽、太」

——守つてあげると、決めていたのに。

何に代えても守りたかった小さな命は、この指先を擦り抜けていった。

飲酒運転の車がいきなり、二人で歩道を歩いていた所へ乗り上げてきたのだ。

相当に酔っていた運転手は、軽傷で済んだという人を轢いたという意識も薄かったと聞く。

…何故？

——どうして？

陽太の命を奪った人間が生きていて、あの子が死ななくてはならなかった理由が何処にあったというのか。

弟を殺した相手が憎かった。

憎くて憎くて……けれどそれ以上に、弟を守り切れなかった自分が、憎くてたまらなかった。

もう、全てがどうでもよくなっていた……。

「——弟さんに、会いたいですか？」

「……」

弾かれたように顔を上げていた。

生は穏やかな表情を浮かべている。

「会うことを、望まれますか？」

死んだ人間に会えるはずがない。

常であれば、何かの詐欺だと思っただろう。

それでも、騙されてもいいから、少しでも希望があるならと。

——沙耶は、その言葉に縋り付いた。

「……たい、会いたいです……！」

後から考えれば、怪しい所ばかりだった。

普通なら真に受けなかったはずだ。

けれど、その時は必死だった。

相手の言葉だけが、ただ一つ、苦しむ自分に与えられた光明だったのだ。

眼鏡の向こうの生の瞳は、どこまでも澄んでいて、冗談を言っているようには思えなかった。

……沙耶は、その選択は間違っていなかったと、後に思う。

「——わかりました」

微笑む生のその眼差しは、慈愛を含んだ柔らかなものだった。

「……おいで、陽太くん」

生は首を捻り、後方へと呼び掛けた。

まさかと思いながら、沙耶は生が声を掛けた奥の方へと目を凝らす。衝立の向こう側から、やがて、円に連れられて、小さな子供が姿を現した。

「——っ陽太！」

その顔も姿形も表情も、何もかも、愛しい弟のもの。

——見間違えるはずがない。

沙耶は駆け寄って、弟を抱き締めた。

万感の想いを込めて名を呼ぶ。

「陽太、陽太、陽太……！」

——冷たい。

「っ！」

ぎゅう、と抱き締めた身体が、熱を持たないことを知って、言葉を

失った。

まるで、氷を抱いているようだった。

「……おねえちゃん」

可愛いその声に顔をあげると。

その顔は、見たことが無い位悲しそうで。

「……陽太？」

「おねえちゃん、ありがとう」

唐突に言われた言葉に、沙耶は目を見開く。

「な……陽太、何言って……」

「僕をまもってくれて、ありがとう。でも、ねえ、おねえちゃん。……泣かないで」

僕もかなしくなっちゃうよ、と言われた。

小さな手が、沙耶の手を握る。

「——笑って？おねえちゃん」

「……陽太」

「おねえちゃん、笑ってよ」

ねだるように言われて、自分が、弟が死んでから今まで、一度も笑っていないかったことを思い出した。

「ねえ、おねえちゃん！」

一生懸命言うその様が愛らしくて。
ねえねえ、とはにかんでおねだりしていたいつもの姿を思い出して。

「…いつ?」

自然と、笑顔が浮かんでいた。

陽太はぱあつと表情を明るくすると、にっこりと笑った。

——そうだ、何より見たかったのは、この笑顔。

陽太が笑うと、何処であろうと明るくなったものだった。

陽太が産まれた時、皆で名前を考えた。

太陽みたいに、人に笑顔をくれる明るい子に育ちますように。
そう願いを込めて——陽太、と名付けたのだ。

「うん!…おねえちゃん、笑っててね?」

「え?」

「おとうさんとおかあさんがさびしくなくなるくらい、笑ってて」

「…陽太」

「——僕、もういかなきゃ」「よう、」

「——ばいばい!」

まるで今からどこかに出掛けてくる、といったように、元気に手を振って。

輝くような笑顔だけを残し、幼い子供の姿は掻き消えた。

——カタン、と一枚の小さな木の板が床に落ちる。

「…陽太?」

呆然とする沙耶の横で、今まで陽太がいた場所に落ちていた、墨で何かの文字が連ねられた木の板を生が拾う。

「——先生、陽太は！？陽太は何処にいったんですか！？」

沙耶は生に掴み掛かった。今まで此処にいたのに。すぐ此処に——！

「…沙耶さん」

諫めるように名を呼ばれて、優しく手が解かれた。

「陽太くんはね、死んでしまってから、貴方のことが気掛かりで、ずっと成仏出来ずにいたんですよ」

「——え？」

「これはヒトガタという、陰陽師が使う呪具の一つを応用したものです。今回は、陽太くんたつての願いで、最後にお別れを言うために僕が力を貸して、彼はこれに乗り移っていたんです。——僅かな時間でしたが」

「……」

「知ってますか？死者を悼む涙があまりにも悲哀を含み、いつまでも絶えないと、故人は黄泉へ旅立つことが出来ないんです」

「……っ」

「『おねえちゃんはいつも泣いてばかり』って、陽太くんが言っていました」

「…じゃあ、私のせいで、陽太は…」

「そう気に病むことじゃありませんよ。人の心は複雑なものですから」

「……」

「……僕の仕事について、お話ししましょうか」

生は、優しく沙耶にそう言った。

「僕の職業は医師ですが、そちらは専門にするものは特にありません」

ん。外科内科皮膚科、どんな症状でも扱います。…けれどそれは僕の本業ではない。主な仕事は、患者さんの傷の消毒をすることです」

「——き、ず？」

「ええ、心の傷。僕が完全に治すことは出来ません。身体の傷だつて、大きい傷は跡が残るでしょう？整形すれば別ですが…心の場合はそれは歪みを来します。大きい心の傷を抱えた人の傷を消毒するのが、僕の役目」

「…消毒って…」

「傷を治すお手伝いですね。精神科とは違いますが…知人に名付けられてから気に入ったので、一応『消毒屋』と名乗っています。僕が消毒するのは、生きている人だけじゃありません。ですから、今回は貴方と陽太くんの傷を消毒させて頂きました。——沙耶さんはまだ、途中ですが」

優しく促され、椅子に座らされた。

「…ああ、貴方はここに、傷があつたんですね」

取られた腕には、歪な裂傷があつた。真つ赤な血をだらだらと流す、大きな傷が——弟を守れなかった、両腕に。

そこに傷があつたことなど気が付いていなかった沙耶は、驚いたように目を見張る。

認知したと同時に、激しい痛みが走った。

そんな沙耶を宥めるように、生は声を掛ける。

「——はい、消毒です」

脱脂綿に浸した消毒を付けられた。

普通の傷に付ける時とは違って、それは、とても奇妙な感覚がした。

「…っ」

「染みますか？…陽太くん、嬉しそうに笑ってましたね。お姉ちゃんがこれで笑ってくれる、って」

「…陽太…」

「いい子ですね。自慢のお姉ちゃんだ、って言っていましたよ。…そうだ、慌てんぼうの陽太くんは、一つ言い忘れたみたいですけど…貴方には、『聴こえる』でしょう？」

消毒終わり、と手を離された。

大きな傷でも、余計に治るのに時間がかかってしまうので、縫うことはしないのだという。

「さあ、貴方をずっと待っている人達のもとへお帰りなさい。——呼んでもすよ」

「——あ…」

「きつと、次からは陽太くんのあの笑顔を思い出してあげられると思います。…さようなら」

生と円の微笑を最後に見て、沙耶の意識は暗転した。

「——成仏したんじゃないのかい、陽太くん？」

空中に浮かぶ霊体に、医師は声を掛ける。

慌てんぼうの子どもの霊は笑って、またひとつ忘れてたのだと告げた。

『あのね…ありがとう』

それだけ言つと、今度こそ、空気に溶けて消えていった。死後の世界へ旅立つたのだ。

「…逝つたね」

「ええ。…先生、さつさとカルテ書いてください。私も暇じゃないんです」

「全く君は…」

生は苦笑いして、カルテにペンを走らせる。

「大体、カルテなんていらなと思うけどな…もう来ないんだし」

「この不良医者。医者なんだからカルテくらいちゃんと書きなさい。記録です、記録」

「…はいはい」

「——さん、市橋沙耶さん？聞こえますか？」

沙耶はふつと目を開いた。

ぼやける視界には、中年の医師らしき姿と、

「沙耶！沙耶…！よかった！」

「陽太だけじゃなくてお前までかと…！」

泣きながら手を握ってくる両親。

——ずっと聞こえていた泣き声は、二人のものだったのか。

「おと…さん、おかあ…」

沙耶はたくさんの医療器具につながれていた。
ああそうだ、と思い出す。

事故が起きた時、沙耶は陽太を庇った。

けれど庇い切れずに陽太は死に、その直後、頭を強打していた沙耶も意識を失ったのだ。

実に一カ月の間、昏睡状態だったことになるそうだ。

意識を失っている間、陽太を守れなかったことだけが心を占めていた沙耶は、自責の念に苛まれ続けていた。

それはきつと、沙耶の目覚めを妨げていたはず。

そんな姉を、弟は心配してくれたのだらう。

——あれはきつと、夢じゃない。

「…陽太」

沙耶の頬を冷たい雫が伝った。

今だけ、今だけだから。

これで泣くのは終わりにする。

だって自分は姉だ。

陽太は笑ってくれたのに、姉の自分が泣いていたら、陽太に格好悪いと思われる。

でも今は、涙が止まらないから。

——だから、泣かせて。

『おねえちゃん、だいすき』

陽太の声が、「聴こえた」気がした。

退院したら、墓参りに行こう。

あの子が好きだった向日葵を花束にして。
もう、大丈夫だよって、陽太を安心させてあげられるように――。

貴方の傷を消毒します。

完全に癒すことは出来ないけれど、ほんの少しのお手伝いに
癒えないその傷に、貴方にとっての優しさという消毒を。
明日へと、道が続いていけるように。

誰にもその道が開かれるようにと、願いながら。

消毒屋（現代FT？not恋愛）（後書き）

またもやHPから。

なんか兄弟ネタ続いてすみません。偶然です。

天外の鎖（現代恋愛？FT）（前書き）

やや残酷描写があります。

天外の鎖（現代恋愛？FT）

——それは、唐突だった。

「……は？」

「愛してるよ、麻樹」

につこり笑って、繰り返されたその一言。
彼女は——思わず、微笑み返していた。

「……いの河野？」

「ん？」

ふふ、と輝くような満面の笑みを浮かべて、がしっと木製の机の端を掴む。

次の瞬間、

「——死にさせーっ！！」

こめかみに青筋を立てた笑顔で、ひなせ まき日生麻樹は、木製の机を相手に向かってぶん投げていた。

麻樹は十七歳、高校二年生。

地毛の茶色い髪は背中にかかるくらいで、同色のぱっちりした大きな双眸が愛らしいが、ごくごく平凡な容姿の、どこにでもいるよう

な女子高生である。

——表向きは。

麻樹の通う高校は桜木高校と言い、一見普通の公立校のようだが……その実態は、一般人は決して識る事の無い、所謂『超能力者』を育成・支援している機関なのである。

裏の名を、第三天外能力養成学校と言う。

『天外』とは、俗に超能力と呼ばれる力と、その力を持つ者達の総称だ。

地上の常人ただひとにあるには過ぎた力、という由縁で名付けられたそうだが、天外が集められた学校は日本でも三つ程在り、桜木高校はその内、三番目に設立された所だった。

普通の人間はまず、この学校がただの高校ではないということも知らない為、ここに通う生徒は皆、基本的に天外である。

一般にも受験する人間はいることはいろのだが、その場合は果てしなく高い学力が求められ、面接において天外に対する知識の有無を確認され、尚且つ天外をサポートしたいと思うような人間でないと入学を許可されない為に、学生の中に一般人はほばいない。

麻樹も例に漏れず、天外の一人だ。

天外は、能力の大きさをランク分けがしてあり、下からAランク、ダブルAランク、トリプルAランクとつけられていて、麻樹はトリプルAに位置している。

ランクが上にあがるにつれてその人数は減っていく上、トリプルは校内でも十人程度しか認可されていないことを思えば、彼女はかなりのエリートなのだった。

——そして、麻樹の能力はというと。

「つぶないな……せつかくの告白なのに、何でそんなに怒るの、麻樹は」

楽々と机を避けた少年は、口調とは裏腹に大して慌てた様子もなく、ちよつと困つたような笑顔で言う。

「何が危ない、よ。あんたならちつとも危険じゃないでしょうが！それに、誰が誰を愛してるですって！？ふざけんじゃないわよ！」

麻樹が噛み付くように非難する相手は、彼女よりも——否、大抵の人間よりもかなり恵まれた容姿をしていた。非凡という言葉で済まない程秀麗に整つた顔立ちに、鳶色の髪と瞳はよく合っている。

十人が十人共振り返る秀麗な容貌を持った彼の名は河野千歳ちとせといい、麻樹と同じ年の天外だった。

「まあ、危なくはなかったけど……俺が麻樹を愛してるのは本当だよ？」

「……っ！！」

「……麻樹？」

俯いてふるふると身を震わせ始めた少女を見て首を傾げ、千歳は一言。

「……照れてるの？ 嬉し泣き？」

——ぶっんっ。

「怒ってるのよこのボケーっ！」

ブチ切れた麻樹の叫び声と共に、辺りに電気が走ったようなバチリと言う音をたてて鳴り、机という机が浮かび上がる。彼らが今居るのは教室だ。

放課後、他に生徒の姿はない。

……つまり、空いた空間に机ばかりが並んでいるということ、それらが全で一氣に浮遊したのである。

通常ならかなり血の気が引く光景だが、努髪天をつかれた少女と飄々とした少年は氣にもしない。

「今日という今日は……本気で殺るー!!」

「目が据わってるよ？」

「やかましい！」

怒鳴り声と大量の机が、物凄い勢いで千歳の許へ飛んでいく。

あわや大惨事かと思いきや、

「全くもう、麻樹は……。元氣がいいのは良いことだけど、備品壊したり人に向かって力を使ったりしたら駄目だろ？」

千歳が、めっ、と幼い子供を叱るような感じで言うと、彼が指一本動かしていないにも関わらず、ぴたりと机の動きが停止したばかりか、それらはきちんと並んで床に降ろされた。

「……！」

麻樹は、千歳をきつ、と睨み付けた。

——相手は全く動じる様子もなかったが。

たった今使用した能力——俗に念動力と言われるそれと、精神感應

力と呼ばれている力。その二種類の能力が、麻樹が有する天外である。

天外は大多数が一種類の力しか持っていないが、上位にいけば二種以上の力の保有者なんてざらにいる。

麻樹の天外は中でも最上級に位置した。

その麻樹の力を、少しも苦勞せずに阻んだ千歳。

——どれだけ彼の力が優れているか、言わずともしれているだろう。

先程トリプルAランクまでを言ったが、実はその上に、例外にして幻とも言われる最高位のSランクが存在する。

現在その称号を持つ天外は世界で三人しかおらず——河野千歳は、その一人だった。

麻樹は、整然と千歳の力によって並べられた机を憎々しげに睨み、

「……だから、あんたって嫌いなものよ」

そう吐き捨てた。

麻樹は努力家だ。

彼女は初めから今のランクだったわけではなく、力の制御や鍛練を積み重ねて、ここまで上ってきたのだ。

生まれ持った能力の差は、どれだけ修練しようと大して変わらない。そのことはよくわかつているし、その気持ちはお門違いとも理解しているが、彼女は、強大な天外を持つ千歳に……僅かながら嫉妬していた。

どう転がろうと、能力で麻樹が千歳に勝れる可能性は億に一つもないのだ。

それだけならまだ尊敬もできようなのに、本人の性格が能力と外見に反して見ての通り常軌を逸していた。破綻しているとも言える。

そんな相手に何故だか気に入られたらしく絡まれからかわれ、同年代を始めとし、果ては上級生の人間にまでそれをやつかまれる。多少厭世的になったって別にいいだろう。

麻樹にしてみれば、こんな天外と関わったこと自体が取り消したい位なのに、文句を言うなら代わってくれと言いたい。

……少年本人が、まず納得しないだろうが。

千歳は気に入っている人間が極端に少なく、麻樹はその少人数の内、一番のお気に入りらしいのだ。

彼女を離してくれるはずがない。

ぶい、とそっぽを向いて、苛立ちを抑えようとしたその時、

『特務部に告ぐ。学内に侵入者あり。天外登録者ナンバーは11762。トリプルAランク能力保持者。天外至上主義者と思われる。現在位置はB棟二階、コントロールルーム付近。至急向かわれたし』

頭の中に直接送られる声。

放送ではなく思念での呼び出しは、非常事態と決まっている。

特務部、とは、トリプルAランク以上の生徒のことで、学内の重要な任務を負っている集団だ。麻樹や千歳も、当然勘定に入っている。

「っ、河野！」

B棟二階と言えば、彼らの目と鼻の先。

早く向かおうと、少年に声をかけつつ振り返ると、

「……何、やってんの？」

思わず啞然とした。

千歳は椅子に座り、だらりと背もたれに身体を預けていたのだ。動こうとする様子は欠片もない。

「……ちよつと」

半眼で睨む。

「んー……ほつとけば。どうせ他の奴らが何とかするよ」

「何他人任せにしようとしてるのよ！ 任務はちゃんとしなきゃいけないでしょ！！」

「真面目だなあ、麻樹は。こんなのどうせ実地訓練みたいな物なんだから、点数稼ぎたい奴にやらせとけばいいの。下手に俺が片付けたら、さつさと終わりすぎて、却って文句言うしなくなる可哀相な奴らにでもね」

「……あんた、ほんつと最低！」

「本当のことだし。コントロールルームなんて此処の頭だよ？ 嚴重すぎる管理がされてるんだから、乗っ取られることもない。その気になれば職員だけで侵入者なんて簡単に捕まえられるんだ。それを、経験を積ませるためにだけに放置して、生徒に任務だなんて言うて押しつけてるだけだから」

「……」

コントロールルームとは、天外のあらゆる情報や学校のセキュリティ等を担当している場所だ。

確かにそこは部外者の誰も入ることは適わなくされているし、千歳の言うことは当たっているのだろう。

——けれど。

「……麻樹？」

何も言わずに身を翻して出ていこうとする少女に、千歳は身を起こ

して声を掛けた。

「……たとえ押しつけられた物でも、任務は任務よ。私は、義務は果たさなきゃいけないと思う。——万が一、相手に抵抗できない人が巻き添えになったりしたら……自分を許せないもの」

いくら政府の機関といえど、天外じゃない研究者など一般人もいるのだ。

一般授業を教える教師の何名かも、その一部だ。
顔だけを千歳に向けて、無表情に麻樹は言う。

「……私は、出来ることをしたい。それが、私がこの力を持った意味だと思うから」

そして、彼女は教室を走り出ていった。千歳を振り向かずに。
一人残された少年は、やがて溜息をつく。

「……しょうがないなあ」

——ひどく愛しげに彼がそう呟いたことを、麻樹は知らない。

麻樹はコントロールルームの前まで来ていた。
その場所は一見普通の壁にしか見えないが、本当は入り口があるのだそうだ。

——彼女はその扉も中も見ただけではないが。
走ったせいだけでなく感情的になった為に少し荒れた呼吸を整えながら、神経を研ぎ澄ませようと目を閉じて集中する。

空気の流れを読みながら、閉じていた感覚を解放した。

あまりにも多くの『声』が聴こえるために、いつもは意図的に封じている……麻樹の、精神感応力。

彼女は、念動力よりも精神感応力の方が圧倒的に強い。強すぎて、封じてなければ普通に生活できない程だ。

そのリミッターを、全てではないが少しだけ外す。

――侵入者の居場所を知る為に。

「――っ」

小さな力しか使っていないのに、あちこちから飛んでくる思念に、顔を歪ませた。

苦しい。

他人の考えが『聴こえ』すぎて。

――昔から、ずっと。

この能力を、疎ましく思うことがあった。

他の人とは違うそれは、強すぎる力故に、麻樹には重すぎたから。どうして、私が。

こんな力いらないと、何度思ったことか。

……でも。

余りに騒がしい感情の渦の中、それでも必死に思念を辿り、

「あ……」

見つけた、と思った直後。

「っ！？」

発見した相手がすぐ背後に居ると気付き、振り向き掛けたのと同時に――後ろ首を掴まれて、壁に叩きつけられていた。

「う……！」

油断した。

失態に舌打ちしたいがその余裕はない。

壁にぶつかつた瞬間、肺の空気が無理矢理押し出されて、苦しかつた。

「この生徒だな。……コントロールルームの入り口を教えろ」

視界の端に見えるのは一人の男。

物凄い力で麻樹の首を絞めつけている。

「な、ぜっ……」

そんなことをしてやる義理はない。

「答えなければ首の骨を折る」

更に手の力が強められた。

「っ……」

ぎり、と骨が軋む。

「――疑問を抱いたことはないか？俺達は天外だからと差別を受け、存在を隠され、まるで実験動物のようだ……」

「ちがつ……！」

……耳鳴りがした。

そんなことないと否定したいのに、声が続かない。相手の言葉が、脳内でこだまのように響き渡る。

「——今の世の中を、変えてやりたいとは思えないか？」

誘うような声音。

その台詞に賛同しようとする自分がいることに気付いて、愕然とした。

ふと、召集の伝達内容が頭の中で蘇る。

『——相手はトリプルA能力保持者……』

——まさか、洗脳の類の、精神操作能力……！？

そういう能力者がいることは知っていた。

よもや、自分が対峙することになるうとは。

「……上層部に一矢報いてやりたいと思うのは間違っではないだろう！ あいつらはただ天外を道具としか思っただけ……なあ、お前もそう思うだろう！？」

いきなり男が声を荒げ始めると、干渉も強くなった。

「やっ……」

気持ち悪い。

至近距離で、男の強い憎悪がダイレクトに伝わってくる。

氣道を圧迫され呼吸を阻害されながら、相手の負の感情に頭の中を

ぐちゃぐちゃにされているような不快感を感じる。
それでも尚抵抗を続け——視界が揺れた。

「……！」

意識が薄れる寸前、ほぼ無意識に誰かに助けを求め、その誰かが——
応えてくれた気がした。

いらないうちで思っていた力も、こうして役に立てるなら、それが私には嬉しい。

——ねえ、河野。貴方は……違うの？

「——っお前……！」

男は目を剥いた。

押さえ付けていた少女の姿が消えたとき驚いた次の瞬間、少し距離を置いた所に一人の少年が立っていたのだ。

端正な顔立ちの少年は、気を失った少女を横抱きにして、彼女に愛おしむような眼差しを注いでいる。

男の声に、初めて少年が振り向いた。

「——！」

ぞくり、と男は総毛立つ。

少年は、冷たい氷のような微笑を浮かべていた。

「……あーあ」

温度の無い、声。

「せっかく、ほっというてやろうと思ってたのに」

くす、と千歳は嘲笑した。

男は身体の震えが止まらなかった。

あれは、アレは、とてつもなく恐ろしいモノだ——本能が、そう訴えかけてくる。

「天外が一番？ それを抑えつけ、世間から隔離する上層部はおかしい？——天外至上主義とかは……どうでもいいんだよ、俺には上の奴等に恨みを持つのは別に当然だと思うし」

相変わらず逃げ出したい気持ちは変わらない。

しかし、同意するかのような少年の言に、男は少し安堵した。

——本能こそは、正しかったというのに。

「じゃあ……」

「でも」

表情を緩めようとした男は、とてつもない力の大きさと威圧感に凍り付く。

「麻樹にさえ、危害を加えなければ……だったんだけどね」

千歳は麻樹を抱え直す。

あくまでも、その手つきは優しかった。

男は、ようやく己の間違いを悟った。

——あの少女には……あの少女にだけは、手出ししてはいけなかったのだ。

「お前は……お前は、誰だ!？」

恐怖に怯え、震える声で尋ねる。

少年は、それは綺麗に微笑んだ。

闇をそのまま宿したかのように『黒い』髪がさらりと揺れ、『漆黒』の双眸が男を射る。

「……知ってるんだろ？」

どくり、と心臓が波打った。

そう、予想は出来た。

外見、年頃、力の巨大さ。

何より、その禍々しいほどに濃く、破滅をもたらしそうな暗い妖艶な『色彩』——。

「——『黒の悪魔』……!」

「そ。その呼び方、あんまり好きじゃないんだけど……ま、いいか。
——どうせ、あんたは」

「ひっ……」

悲鳴すらも凍り付く。

目を逸らすことすら許されない。

……少年の影が、揺らめいた。

「――死ぬんだし」

ばきん、と音がした。

一瞬遅れて、男は気付く。

「……え？」

――ありえない方向に曲がって折れた、己の両腕に。

「あ……あ、あああああ!!」

「――その腕、麻樹に触ったな？」

「ぐああああ!!」

千歳が言う言葉も、激痛にのたうち回る男には最早届かない。

「それに……麻樹を傷つけたな」

お前如きが、と氷土の声音が吐かれた瞬間――影が、蠢いて。

「――喰え」

無慈悲な声で呟かれたその一言で、少年の影が爆発したように広まり――男を、瞬く間に包み込んだ。

「う……うわあああ!!」

叫び声すらその身に喰らい、一瞬後には影は元に戻り、男の姿は消えていた。

「……こいつは、ゆつくり喰った物を消化していくから、皮膚から徐々に溶けていく。普通に殺すだけじゃ物足りなかったからこうしたんだ。俺が作ったんだよ、便利だろ？ ……って、聞こえないか」

——冷酷な笑顔を浮かべた少年の影からは、断末魔の声が聞こえてくるようだった。

「麻―樹っ」

「うるさいうるさいっ！」

今日も今日とて、彼らは何時ものじゃれ合い——と言うと彼女は怒って否定するだろうが——を繰り返す。
ただ、その日はいつもと少し違った。

「…え？」

「だ、だから、こないだ助けてもらったお礼を今度するから、何がいかって聞いているの！」

少年は瞬きを繰り返し、少女は無然としてそっぽを向く。

わずかに見える彼女の頬が赤いのは、気のせいではないだろう。

少年はとびきり嬉しそうに破顔した。

少女はまた、それに気付かない。

……そんな笑顔は、彼女にしか向けられないということにも。

「——じゃあ」

「……何？」

振り向いた麻樹の目に、少年の意地悪そうな笑みが映る。

「麻樹がいいな」

「……は？」

目を点にした少女は、少年の意味深な笑顔を見ているうちにやがてその意味を悟り、

「河野ーっ!!」

顔を真っ赤にして怒鳴った。

「本気なのに」

また飛んできた物を避けて言うと、

「余計悪いわーっ!!」

次々に周囲の物が飛来し、千歳は笑いながらそれらを避ける。それですますます麻樹は怒る。穏やかな、二人の天外の日常。

「あんだなんか、大っ嫌いよー!!」

「残念。俺はこんなに麻樹を愛してるのに」
「嘘つけー!!」

彼らの日々は、こうして過ぎてゆく。

——君はいつも、非難する。

力があるのに、何故使わないのかと。

……あのね、麻樹。

俺は、ずっと前に決めたんだ。

——この異質なる力は、君の為にだけ使おうと……決めたんだよ。

始めの言葉は、決して偽りじゃない。

けれど、それが伝わるのは……いつのことだろうか。

天外の鎖（現代恋愛？FT）（後書き）

「愛してると言って殴られる男が見たい」という友人の要望より出来た話。HPでどうやら一番人気。超能力っぽいものです。いかがでしょうか？

気に入ったの一言でも反応をくださると大変嬉しいです。

あたたかな檻（現代FT？義兄妹）（前書き）

過去の作品なので文章など稚拙です。

若干のゲテモノ要素があります。（ほぼギャグみたいなものです）

あたたかな檻（現代FT？義兄妹）

——辺りは、闇に包まれていた。

「はあ、はあっ——も、もうっ!!」

息を乱して、走りながら叫ぶのは、一人の少女。
腰の辺りまでの艶やかな長い黒髪と、同色の瞳が愛らしい、高校生位の少女だ。

「何で、いつもいつも私がこんな目につ！」

足を止めずに後ろを振り返ると、ずりずりと後を追いかけてくるモノの姿が見える。

それは所謂、古来から魑魅魍魎とよばれる類のモノだった。

「い、ついやーっ！　ぬるぬるしたのはいやーっっ!!」

泣きそうな少女の絶叫が、誰も居ない通路に響く。と共に、彼女の走る速度が上がった。

アスファルトを駆ける音が響き渡る。

只今の時刻、九時四十五分。

さすがに夏と言えど、辺りは暗い。

常なればもっと早い時分に帰途につくのだが、如何せん、今日は色々と用事が重なって、こんなに遅くなってしまった。いつもより二、三時間以上も遅い。

これはもう、帰り着いた時に、地獄の大王が怒り狂っていることは間違いない。

よほど、友達の家に泊まらせてもらおうかとも考えたが、そんなこ

とをしても執行猶予が延びるだけだ。

そんなこんなで、急いで家に帰ろうと走り出したところ、後をつけてきているモノの存在に気付いた。忍び寄るその暗い影を撒こうと孤軍奮闘をしていたのだが、それは非常にしつこかった。

大分前から、とうに息は切れている。

そこで相手がどれくらい近くに来ているのかと、振り返った少女が目にしたのは、彼女が最も嫌悪する物体だった。

そのことで、火事場の馬鹿力のように、一旦は生理的嫌悪から足も速まったが、徐々に速度は落ちてくる。

りーりーと何処かで虫が鳴いているが、そんなことに気がつく余裕も無い。

「なめくじなんて、嫌いーっ！」

そう、台所に点在するあの黒光りするものは（名前を呼ぶのもおぞましい）滅殺してしまいたいほど嫌いなのだが、あのぬるぬるしたのそのそと這い回っている物体も、憎むと言っても過言ではないほど大嫌いだった。

苦手なんてものではない。この世に存在すると思うだけでおぞましい。

それなのに、今後ろを追ってくるのは、巨大ななめくじ、そのものだった。

彼女の名前は神薙^{かななぎ}優希^{ゆうき}。

十七歳、高校三年生の、現役受験生だ。

優希は、基本的に、虫や両生類の類を一切受け付けない。視界に入れたくないほど、嫌っているのだ。

——昔から、彼女には不思議な体質が備わっていた。物心ついたときにはもうすでにその体質だったから、おそらくは生来のものなのだろう。

その体質とは、一言でいうなれば、「魔寄せ」とでも言うのか。

一般的——という用語弊があるが——まあ、魑魅魍魎の存在を知っている者たちの間で、「闇」の部類に属すると認知されているモノを、惹きつける。それが、彼女の持つ特殊な体質だった。よって、少女は行く先々で、妙なモノに遭遇する。

一日たりともそういったモノと出会わなかった日はないが、数年前から、いつもはある人物に持たされた特注の御守りのおかげで、害のあるモノをあまり寄せ付けないように——そのひとの言葉を借りれば、そういったモノから姿を隠してくれるらしいのだが——なっていたのだけれど、今日に限って、御守りを何処かで落としてしまった。

先程、それに気がついた所存だ。

御守りをくれた人物本人、家で自分の帰宅を待っているであろうひとから、罰せられる罪がまたひとつ増えた。

それだけでも十分災難なのに、どうして、今自分を追っているモノは、自分が一番嫌いなモノの姿をしているのだろう。

必死の形相でひた走る。

が、曲がり角を曲がったところで、彼女は何かに躓いた。

「ぎゃっ！」

乙女にあるまじき悲鳴と共に、見事なまでに転んだ優希は、危うく顔を地面にぶつけるところで、慌てて手をついた。

何しろ猛スピードで走っていたので、転んでしまつて怪我をするなというほうが、彼女にとっては無理だ。

手のひらを確実にすりむいたことがわかって、悲鳴をあげる。

「また怒られることが増えたー！」

怪我をして、「彼」が黙っているはずが無い。

どうして今日は、やることなすこと全て、後で「彼」に叱られる方

向に向かうのかと、優希は心の内で頭を抱える。

そうこうしている間にも、追手は来ていた。

外灯を遮り、己の上にふっと掛かった影。その存在に気付いて、少女は固まる。

おそろおそろ振り返って、すぐ、そばに、巨体が。

「いやーっつー!!」

絶叫に覆いかぶさるように、なめくじの頭が傾いで、近寄ってきた。あわや少女に触れようというその時。

巨大なめくじの、声にならない咆哮が響いた。

「——え……」

視界の端に映るのは、赤い炎の立ち上るなめくじの姿。

苦痛にのたうちまわるそれは、既に少女から離れたところにいた。

「——今日は、御守りをどうしたのかな？」

涼やかな声が、後方から届いた。

ぱつと振り返ると、誰もが見惚れずにはいられない、美貌の青年がひとり、立っていた。

「媛兄^{えん}！」

びつくりして、声をあげる。

そこに居たのは、兄である神薙媛夜^{えんや}だった。

「な、ななな何でここに!？」

最早、巨大なめくじなど眼中にない。

——それより遥かに恐ろしい者が降臨したのだから。

家で自分を待っているはずの人物、「彼」が、媛夜である。

夜を写す漆黒の髪、深淵を覗かせる闇色の瞳。

自分と同じ「黒」に分類される色彩なのに、その色は、どこまでも深く、どう見ても、別の色のようなだった。

「優希？」

「は、はいっ」

優しく囁かれた声に、びくんとして反応する。

…その声が、響きのごとく優しさを内包したものでないことを身にしみて知っていたために、少女は内心で号泣していた。

「後でおしおきされるの、覚悟しといてね？」

「……………ハイ」

——あきらめるしか、なかった。

二人の、己を全く無視したやりとりに腹を立てたのか、炎に撒かれながら、嫌な咆哮を上げて、なめくじが迫ってこようとした。

気色悪さに優希はひっと息を呑む。

「ふうん。いい度胸だ…俺に立ち向かおうなんて、ね」

対して、にやりと媛夜は笑った。整った顔立ちは幼少の砌^{みきり}より周囲を騒がせてきたが、その頬笑みは嫌に好戦的で、顔が良い分恐ろしい。

優希がそれに、ぞっと鳥肌を立てたのは言うまでも無い。

ついつい、相手が人外のものとはいえ、同情してしまった。

なめくじの身体に、また別の火の手が上がる。

巨大なめくじがもがき苦しむ様子は、えも言われぬものがあつた。目を逸らしたいが、身体が固まってしまっている。ふと、兄がじいっと自分に視線を注いでいるのに気がついた。

「？」

何事かと首を捻ると、媛夜が、少女の手を取った。手のひらに滲む、鮮血。

途端、媛夜の周りの空気が凍った。

「——これは、どうして？」

壮絶、としか言いようの無い笑顔だった。

どす黒い何かが彼の後ろで湧き出ているように見えて、一瞬意識を飛ばしかけたほどだ。

…勿論、媛夜がそんなことを許すはずも無く。

「——優希？」

瞬時に意識を持ち直して、気絶する代わりに、嫌な汗が大量に噴出してきた。

「こ、ここ、転んで…」

「へえ——」

頷いて……悪魔が、君臨した。

「フルコース、決定」

至極愉しげに告げられた言葉は、少女にとって、死刑を意味してい

た。

「そ、そ、それだけはっ！ それだけはやめてーっっ！！」

顔面蒼白、…鼓動が不規則になつてきた気がする。

「んー、じゃあ、代わりに何をしてくれる？」

「何でも、何でもするからっ。フルコースは嫌ー！」

「…何でも？」

「な、何でもっ！」

こくこく、と猛烈な勢いで首肯する。

すると、悪魔は、にやりと笑った。

思わず、背筋に悪寒が走る。

「何でも、ね。じゃあ、それでいいよ」

輝かしいまでの笑顔を見せられても、身体の震えは止まらない。

恐ろしいことをしてしまったと、がたがたと震えながら、今更ながらに思った。……後の祭りだ。

媛夜がのた打ち回るなめくじに向き直って、一言、呟いた。

「消える」

その言葉と共に、なめくじの身体がばきばきと音を立てて氷に覆われ、それからすぐに、業火に包まれて跡形もなく消え去った。

どうせなら一撃ですませてやればいいものを、わざわざえげつないやり方をとった兄に、顔がひきつる。

それでも、短時間ですませたかったから、わりと簡単なほうにしたのだろっ。時間さえあれば、もっと残酷な方法を取っていたであろう。

うことは、想像に難くない。
くるりと振り返った媛夜は、極上の笑みを浮かべていた。

「…帰ろうか？」

手を差し出されて、とらないわけにもいかず、その手を握った。

帰り道、さーて何をしてもらおうかな、と機嫌の良さそうな兄の横で、何を言いつけられるのだろうと、妹がびくびくしていたことは、言うまでも無い。

その日は本当に、ツイていなかった。——ある意味、憑いていたかもしれないが。

ふんだりけったり。

——遠い、遠いところで、子どもが泣いている声がする。

どうしたの、と問いかけるけれど、子どもは泣き止まない。

それどころか、ますます酷くなる。

どうしようもなくておろおろし始めたとき、ふいに、あたたかなものに包まれた気がした。

すぐ、側で。

そして、遠くで。

同時に、同じ優しい声が響いた。

『大丈夫だよ』

その言葉を紡いだひとが、自分を抱きしめてくれたのがわかった。
同時に、泣いていた子どももまた、抱きしめてもらったことが、何

故かわかった。

……子供はもう、泣いていない。
唐突に、理解した。

——ああ、そうか。あの子どもは……。
ぬくもりが、消える。

——私、だ。

「——あ、れ」

目を覚まして、優希は首を傾げる。

「どんな夢、見てたんだっけ……」

瞼を上げるのと共に、散ってしまった夢の痕。

風花のように、手のひらで掴んでも、すぐに消えてしまう夢は、いつもひとを翻弄させる。

未練はあれど、おそらく帰っては来ない夢を、しづしづ諦めて、寝返りをうとうとした優希は、ぴたりと動きを止める。

今更ながらに気付いたが、背中に、何か温かなぬくもりがある。

腰の辺りには、わずかな重み。

その正体に思い至った彼女が、奇声の混じった大きな悲鳴をあげたのは、当然のことだろう。

「……まったく、もうっ！」

ぷんぷんと怒る優希を尻目に、元凶は、飄々とした態度を崩さない。

「朝から元気だね、優希」

「誰のせいよっ!?!」

ぬけぬけと言い切った兄を、百獣の王さえ降参しそうなほど鋭い視線で睨み付ける。

媛夜は全く動じない。

…朝、目を覚まして、ひつついていたぬくもりは、媛夜だった。いつのまにか隣にもぐりこんで来て眠っていた兄に、優希が怒らないはずがない。

いくら兄妹とはいえ、年を考えると、いうものだ。

媛夜は、優希より四つ年上で、この間二十二歳の誕生日を迎えた。

優希とは少しも似ていないその華やかな容姿のおかげで、彼に想いを寄せる女性は後を絶たないのだが、誕生日当日、多くの女性から誘われたのに、彼は全て断って、家へ帰って優希と二人で自分の誕生日を祝った。

…媛夜のことを知っている、優希の昔からの友人は、「シスコン」と呼ぶ。

——それは、限りなく真実に近いだろう。

この頃の優希は、もはやその域を超えてしまったのではないだろうかと思っていた。

「媛兄はさ、私にばかり構ってないで、早く彼女作ったら？」

「え？別に、いらないし」

「——あ、そ」

呆れてしまった。

朝食を済ませて、後片付けをしてから、鞆をひつつかむ。

玄関で靴を履いているところで、見送りに来た媛夜が、声を掛けた。

「…ね、優希」

「んー？何？」

とんとん、と履き心地を確かめる。

よし、ばつちりだ。

振り返ると、いつもの温和な笑顔があった。

「俺と初めて会った時のこと、覚えてる？」

「はあ？そんなの産まれてすぐのことでしょ。覚えてたら、私は超人よ」

いつてきます、といって、外へ出る。

空は、薄い灰色の雲に覆われていた。

少女は、青年が、どこか寂しげな表情をしていることに気がつかないまま、出て行った。

「——俺が、守るから」

幼い日。

ずっと昔のあの日に、そう、決めた。…そう、誓った。

『媛夜。この子が、お前の妹になる優希だよ』

連れられて来た、初めて会った二歳の少女。

愛らしい容貌をした少女は、あちこち怪我をしていた。

その怪我の原因を知ったときは、猛烈に腹を立てたものだ。

常々、あまり感情と言うものがよくわからなかった自分が、腹を立てるなんてことに驚いている間もなく、小さな子どもが、笑顔を浮かべた。

——その時、彼女に、彼は囚われたのだ。

意に反してではなく、自ら進んで。

初めて、何かを守りたいと思った瞬間だった。

「…すっかり、忘れてるよなあ」

苦笑する。

自分たちが血の繋がりなど無いということを、流石に二歳という年齢だったせい、優希は綺麗さっぱり忘れてしまっていた。

「まあ、いいか」

どうせ、あと少ししたら、告げるつもりだ。

「…逃がさないから」

妹だと思ったことは、一度も無い。

出会ったその時から、彼女は自分を虜にしたのだから。

彼にとつて、彼女は、出会ったときから、誰よりも何よりも大切な存在で、誰にも譲れない、生涯を掛けて共に生きると決めた者なのだから。

「逃げようとしても、絶対に逃がさない。追いかけて、捕まえる」

時々、自分の中の、あの少女に対する想いが、恐ろしくなる。

出来ることなら、誰の目にも触れさせず、閉じ込めて、自分だけのものにしておきたいという、行き過ぎた独占欲。

そんなことを、あの少女が望むはずも無い。

自分が、こんなにも彼女を想っていることに、少女自身は全く気がつかない。

——せめて、あの無防備さをもう少しどうにかしてくれないだろうか。

青年は日々、ため息を吐きながら己と戦っている。

あたたかな檻（現代FT？義兄妹）（後書き）

むかしに書いたまま眠っていた話。

続きものにしようと思っていたはずがもう書かないと思われます。

義理の妹に執着するお兄ちゃん。

私の書く話はヒロインに執着する男が多い気がす…一途なんです、
と言っておきます。

らっきー×あんらっきー（転生トリップ）

『あなたは運が良いのね』

何度も何度も、繰り返し聞いてきた言葉だった。

そうなんだろうと漠然と思いながらも、あまり嬉しくはないこと。今まで、赤信号に捕まったことなどほぼない。天気も晴れて欲しい時は晴れているし、外出したくない時は台風やらなんやらで都合よく済んできた。

気紛れに応募してみれば懸賞は毎回当選するし、無理矢理買わせられた宝くじは見事当たった。

——人の幸運というものは他人からすればやっかみの対象でしかない。

物的な幸運はあっても、その代わり、人的な運は皆無に近かったらしい。

他人とのあたたかな関わりを知らないままに、憎悪に満ちた凶刃に倒れ、私は早々に人生の幕を降ろした。

そこで命を終えることを望んでいなければ、多分また、『運が良かった』で助かっていたのだろうけれど——自分の死は、对人的な運よりも物的な運の方に重心が傾いていたのだろう。

そこで助かることを望まなかったから、私は一度、死んだ。

——そして、何の因果が生まれ変わったのは、日本どこるか地球という惑星でもなく。

またもや对人的な運に恵まれなかったのだが、前世に比べて物的運が減少しており、代わりに違う運が足されたようだった。

何と、今度は人外にもてもてらしい。

「こっちにおいで」

「何言ってる、俺の所に」

「いやいや、俺だろう」

力の強い男性が三名、異様な雰囲気で私を呼んでいる。
おろおろと困っていると、優しく頭を撫でられた。

「あやつらの戯言は気にしないでいい。お茶でもしょうか」

ふわりと優しい笑顔。

「うん！」

きゅ、と抱き着いた体から漂う柔らかな香りも、長い白銀の髪も、
暁色をした切れ長の目も全部全部、大好きだった。

——例え、相手が人間じゃなくても。

生まれ変わった世界には、人間とは別に「魔人」という種族がいた。
人に比べて数は非常に少ないが、魔法を扱える力ある者たちだ。人
間のことは特に何とも思っていないのだが、人間は彼らのことを怖
がっているらしい。

前世では、生まれてすぐに事故に巻き込まれて私一人生き残り、両親
は亡くなって天涯孤独だったのだが、現世では、母子家庭に生ま
れて、しかも望まない子どもだったらしく捨てられてしまったそう
だった。

前世では、大人達に何かと利用されてきた。今回もそうなるのだろ
うかと考えていただけに、魔人の中でも力ある白銀の君に拾っても
らったことは、降って沸いた一番の幸運だった。

前世の半分程しか運はついてないが、今回は妙に魔人に好かれる何

かを持つて生まれたらしく、よくよく求婚者がやってくる。先程の青年達はその代表格だった。

養い親と仲良くティータイムを過ごしながら、初めて他人の温もりを得た幸せを噛み締めつつ思う。

私はまだ五歳なんですが、色恋沙汰はあと十年位後にしてくれませんか、と。

何はともあれ、人間との触れ合いはなくても、幸せに暮らしています。

それからも日々口説かれ続け、十年も経った頃には求婚者が後を絶たず、夜も安心してなかなか眠れなくなるだなんて、その時の彼女には知る由もなく。

結局はとある魔人と婚姻を結ぶことになるのだけど——それはまた、別の話。

らっきー × あんらっきー (転生トリップ) (後書き)

物的には運が良いのに人に関する運はない少女の話。トリップ書こ
うと思ったらこんな話に。

勇魔の小唄 3 ～ ばとる・すりー ～ (前書き)

勇魔の小唄の続きです。

勇魔の小唄ふとる・すりー

ちちち、と小鳥の鳴き声が響くような青く高い空の下で、幼い少女の罵声が響き渡った。

「貴様などもう知らぬ！馬鹿者ー！！」

いつものように叫んだメリエルランスは、小さな身体を翻して駆けて行った。

「…やれやれ」

嘆息した勇者は、少女が走り去った方角が緑深き森であると気付くと、更に肩を落としながら後を追ったのだった。

「あの、無礼者がっ！」

悪態をつきながら、生い茂る草木の中を突き進む黒髪の美少女。八つ程の小さい子供が、大の大人でも迷う巨大な森の中をずかずかと進んで行く様は恐ろしいものがあつたが、それを見ている者は無い。

また、少女自身、自分が迷子への道を通つ走っていることに気付いてさえいなかった。

あてもなく、メリエルランスはただ歩いているだけだったのだ。

「くっ。あと少しでも魔力があれば、馬鹿になど——」

——鈍い音がした。

「くっ……!!」

倒れた古木の飛び出していた太い木の枝に、額を強かに打ち付けた魔王はしゃがみこんで痛み悶える。ぶちぶちと呟いていた所だったので、舌も軽く噛んでしまった。目の前に星が飛んでいた。

「——おによ（の）れ、木すらも私をおちよくるか…痴れ者がっ！」

大いなる勘違いだったが、メリエルランスは痛む額を押さえつつ、怒りを込めて、寿命を迎えた木をべしべしと——実際はぺちぺちと叩く。

「貴様など燃やして——」

言い掛けた言葉を、途中で止めた。

その木がとても大きく、樹齢も高かっただろうことを改めて見て取って、何故か彼女は思い直したのだった。

「——そなたは、この森で生きてきたのだな」

緩やかな風が、息づく緑を撫でていく。

少女の瞳は、外見にそぐわぬ落ち着いた光を宿していた。

いつもわかりやすい程感情を顔に出していた彼女だが、この時ばかりはきつと、誰が見ていても、彼女の考えは読めなかっただろう。

それ程、少女の雰囲気はがらりと変わっていた。

「…許してやろう。私は寛大なのだ。朽ちた者まで手に掛けようとは思わん」

——しかし、一瞬の内に、憂いさえ帯びていた表情は一変し、無邪気で尊大な子供が戻って来る。

「——だがなあ、私は痛かったぞ。もう少し、他の者を思いやる終わり方を選んだらどうか？」

最早役目を終えた者に——否、それ以前に木に話し掛けてどうなるという訳でもないだろうに、メリエルランスはぶちぶちと古木に文句を投げ付けていた。

「…メル、何してるんだ…？」

その場面に丁度やってきたウィルが、眼前の光景に思わず目を疑ったのも、無理からぬことだろう。

「…メル？」

「……………」

「メールってば」

いつぞやのごとく、ウィルがいくら呼び掛けても少女は返事をしない。

ずんずん歩く後ろ姿に、ウィルは言った。

「……出口、そっちじゃないよ」

「……！」

ぴたり、と足を止めて、何も言わずに向かう方角を変える。

「そっちでもないから」

腕を掴んで引き止めた。

少女は無言のままじたばた暴れる。

しょうがない、とウィルは呟くと、その腕にメリエルランスを抱えあげた。

「は、離せ！降ろせー！！」

漸く声を出して騒ぎ始めたメリエルランスに顔を叩かれ、

「痛い痛い。…はいはい、拗ねっ子お姫さま、機嫌を直して下さいねー」

ぽんぽんとあやすように背中を叩いた。

「やめんか！！」

森の奥で繰り広げるべきものではない微笑ましい——メリエルランスの怒りに反して他人には間違いないそう見えるだろう——その光景。

彼らは失念していた。

そこが、弱肉強食の自然の世界であることを。

——グルルルル。

「——！」

突然聞こえた獰猛な唸り声に、瞬時に身構えたウィルはメリエルランスを降ろし、背に庇うような態勢を取る。

束の間惚けていたメリエルランスは我に返って、

「な、何しておる！私は庇われずとも——」

「黙ってる——！」

「……っ！」

普段とは違う口調で一喝され、メリエルランスはびくりと飛び上がった。

何か言いたげに口を開いたが、ぴりぴりと緊張が張り詰めているのを感じて再び閉ざす。

声は、茂みの向こうから聞こえた。

さぞかし大きな獣だろうと見当をつけ、戦闘体勢に入っていたウィル。

緑ががさりと動き、飛び掛かってくるかと剣を構え直した——が。

——ガルル。

「……………あれ？」

拍子抜け。

——何とそれは森の王、狼だった。

銀色に光る瞳と綺麗な毛を持った狼は、恐ろしい声をあげ、鋭い歯を剥き出しにしてこちらへ寄ってくる……しかし。

「……………小さっ」

思わずウィルは口走った。

——その狼は、何と子犬程の大きさしかなかったのだ。
一瞬、犬と見間違えた程だった。

「……………何？」

ウィルの後ろから顔を出したメリエルランスが、狼を視認する。

「…あっ！」

息を吞んで、次の瞬間、その瞳を輝かせた。
まずい、とウィルは思う。

小さな子供は概して小さな生き物が好きだ。
メリエルランスもその例外ではないらしい。
手を伸ばして近寄ろうとしている。

「…！」

例えいくら外見が愛らしからうとも、害が無いとは言いきれない。
ウィルは慌ててメリエルランスを引き戻そうと——、

「メ——」

「フェンリル？フェンリルではないか！無事だったのだな！」

——クーン。

「……………はい？」

嬉々としてその毛を撫でるメリエルランスの顔を、甘えたような声を出して狼は舐めていた。

「こら、フェン！くすぐったいではないか！」

「……えーと」

状況はよく理解できないが、少女を守ろうと伸ばした手は無駄だったらしいと、ウィルは脱力した。

「フェンは私の番犬だ！」

どうだ凄かろう、と言いたげに胸を張るメリエルランスにウィルは言う。

「や、それ犬じゃなくて狼」

「……ご、護衛だ！」

「……ふーん、こんなに小さいのに？」

「馬鹿にするでない！フェンも、私を守った為にわけあって小さくなってしまったのだ！」

「へー、そうなんだー」

明らかに信じていないウィルに、メリエルランスは怒りで顔を真っ赤にして怒鳴った。

「貴様、私を愚弄しおって……よかろう、どれだけ優秀な護衛かを見せてやる！フェン、この男を始末せよ……！」

メリエルランスが、びしつとウィルを指差すままに、フェンリルという名の狼は勇者に飛び掛かるうとして、

「ほーら、餌だぞー」

……ぱい、とウィルが投げた鶏の骨を追い掛けていき、嬉々として噛り付いた。

「…優秀な護衛、ねえ？」

「フェンーっ！！」

はつと正気に返ったらしい狼は戻ってきて、主人に申し訳なさそうな表情を向ける。

そして再びウィルに向かおうとしたが、

「…食うか？」

彼が差し出した鶏肉に喜んで飛び付いたのだった。

「こらーっ！！」

メリエルランスの怒号が森に響き、驚いた鳥が数羽、ばさばさと羽ばたいていった。

森を出た時にはフェンリルはすっかりウィルに懐き、撫でられても嫌がらないどころか、ふさふさの尻尾をぱたぱたと振っていた。そんな忠実な獣に、裏切り者と言いながらふてくされたメリエルランスのご機嫌は、ウィルがまた与えるお菓子で回復するのだが、それはもう少し後のこと。

こうして二人の旅路に、一匹が加わったのであった。

勇魔の小唄 3 ～ ばとる・すりー ～ (後書き)

狼っていいですね。仔狼とか。またもやサイトからの転載です。フェンリルは知人から人気が高いです…私の愛が詰まっているからでしょうか。

結構みなさん活動報告でSSとか書かれてるみたいだし今回はちょっとした番外みたいなのも以前書いたのでそちらで載せてみます。

墮天使の箱庭（前書き）

残酷表現が多めです。お気をつけください。

墮天使の箱庭

——静穏。

獣の遠吠えも止んだ夜闇の中、月の光だけが冷え冷えと降り注ぐ大地の寂れた古い裏路地を、一人の人間が歩いていた。

その足取りは羽根のように軽やかで、足音がほとんど無い。

まっすぐに伸ばされた背筋は、見る者に清々しさを与える程潔かった。それが街中であれば、人々の目を惹き付けるだろう。

……しかし、そこは無法地帯だった。

感じがよくとも、何の意味も無い。

その場所は、都市の中でもとりわけ治安の悪い所で、表には出られない者達の溜り場だったのだ。

正に、力こそ全ての世界。

そんな所を一般人が出歩いていれば、どうぞ襲って下さいと宣言しているようなものだ。

それにその人物は、仕立ての良い闇緑色のコートに白いワンピース、その下に黒いズボンを履いた「少女」だった。

微妙にちぐはぐにも見える格好だが、何にせよ目立つのは確かだ。

肩までの黒髪はさらりと風に流れ、大きな灰青色の瞳は夜の中でも美しい輝きを放つ。

その顔立ちは、大変愛らしかった。

——そんな目立つ人間が、このような場所で無事でいられるはずがない。

まして、どう見ても丸腰なのだ。

明らかにカモと知れているモノを放って置くほど、そこに居る輩の心は善良ではなかった。良心の欠片さえ持ち合わせていないのだ。

不思議なのは、その少女が歩いているのが、巨大な裏路地の中央辺りということだ。

この道に足を踏み込んだ途端に、身ぐるみを剥がされて売り飛ばさ

れていてもおかしくなかったのだが――。

「……よお、別嬪さんがこんな所に何の用だい？」

「襲われに来たのかぁ？」

「じゃー俺たちが遊んでやるよ！」

ぎやははは、と品の無い笑い声を立て合う、路地の隅に居た男達に取り囲まれて、少女は足を止めた。

じつと、無表情のまま男たちを見回す。

一人一人順番に顔を見ていき――ある男の顔を目にした途端、ぴたりと視線を固定した。

そして、可愛い顔とは反対に、生唾を飲むほど妖艶な笑みを一つ刻む。

同時に、甘く誘うような香りが少女から漂ってきた。

「――……」

ごきゅり、と男達は唾を嚥下する。

相手の目には獲物を狙う捕食者のそれが宿っていたのだが、愚かな男共はそれに気付かない。

寧ろ、少女が視線を巡らせたのは多少驚いただけで、その笑顔は逆に覚悟を決めて誘っているのだと都合の良いように曲解された。にたりと笑って、男達が少女に触れようとした所――。

男の一人に視線を定めたまま、赤い唇が開いて、音を紡いだ。

「……見つけた」

それは、嬉々とした声音だった。

意外なことに少々低音の声に男達はわずかに面食らったが、また下卑た笑いを上げて、少女に見つめられている男自身が、選ばれたの

は己かと、他者への優越を感じつつ相手を引き寄せようと手を伸ばす。

その瞬間、

「何だ、俺が好みだったのか？ 嬢ちゃん——」

——すとな、と音がした。

「……え？」

……何が起ったのかわからない、と男達は目を白黒する。

突如、笑みを湛える愛らしい少女を残し、男達は皆、足が立たなくなつて、地面に膝をついたのだ。

力を入れようにも、足が動かない。

数秒して、少女に触れようとした男はようやく己の異変に気付き、叫び声を上げた。

「う、腕が……俺の腕がああ！！」

——男は、右の手首から先が無かった。

「うつせえな——」

呆れたような声を、少女は発した。

汚れた地面に無造作にごろりと転がっている男の手をつま先で軽く蹴り付けてから、何を思ったか、非常に渋い表情を作つて、それを拾い上げる。

「ほんとなら寸刻みにしてやる所だが……まあいいか。若干抵触はしたが、決定的な言葉は言つてね——からな。拾わないとサイがうるせ

「し…」

そう呟いて、ぼたぼたと血を垂らしながら悶え叫ぶ男に一步近づく。

男は痛みに転げ回りながらも、近づいてくる者への怖れがそれに勝り、顔一面に怯えを浮かべた。

――少女の手には、月光に反射して光る、銀色の刀身のナイフが一本、握られていた。

「ひつ、く、くるなあ――！」

ナイフから、男の血とわかる赤い液体が滴っていることも、男の恐怖を増長させた。

男は後退るが、後ろが壁とわかって、絶望的な顔をした。

「…こんな格好してるから悪いのかもしれないけど――」

少女は笑った。

…その瞳に、剣呑な色を宿して。

「俺はなあ、女に間違われるのが何より嫌いなんだ…よ――！」

――どすっ！

「ひつ――！」

闇の中で、灰青の瞳が煌めいた。

男たちは恐怖のあまり身動きすら出来ない。

手首を切り落とされた男は、顔の真横で壁に垂直に突き刺されたナイフの刃を見て、震え上がった。

「ひ…ひ…っ」

「あーもう、めんどいなー」

ぶつぶつと呟いて、少女は男の腕を掴むと、切り落とした手と断面を合わせる。

ひゅう、と感心したように息を吐き、

「さっすが特別製のオリハルコン。切断面は綺麗に切れてる。…治しやすくして便利なことで」

身動きが取れないでいる男を放って、少女はマイペースに事を運ぶ。震える男を放ったまま、切断面を強く引き合わせ、上からそこを握ると、

「——『繋げ』」

端的に、その一言を発した。

その瞬間、仄かな光が男の手首をとりまく。

淡い橙色の光だった。

何かの囁きのような小さな音がして、光は消える。

「——あー、積み立てなくなったかあ…ちっ…」

意味のわからないことを言い、低く舌打ちをした少女に男たちは怯えた。

「な…な…」

ぱくぱくと魚のように口を開閉させる男に、少女はにやり、と悪役

のような笑みを浮かべ、

「――ま、でもこれで給料入るからいいか。動くなよてめーら……つて動けないよな。いつもながら科学班の作った香水は抜群の効き目だ」

ぽい、と放るようにして男の腕を離す。

男達は息を呑んだ。

「う……腕が……っ」

何事もなかったかのように、傷跡一つなく、その腕は繋がりに、血が通っていたのだ。

男達は、背筋にぞつと悪寒が走るのを感じた。

「ば……化け物……！」

「はあ？ 失礼な。俺が化けもんだったら他の奴らは何だっつーの」
けっ、と吐き捨てて、少女は壁に刺さったままだったナイフを抜いた。

柄の部分くるりと回すと、それを外して、中から小さな黒い機械を取り出す。

かちり、と何かスイッチのようなものを押すと、

『――はい』

機械から声がした。

それは冷たく、感情も抑揚も一切無い声だった。

「あーもしもし、サイ？ 標的確保した……はず。おい、お前」

機械に話し掛けていた少女が突然振り向いて、先刻、手を斬った男に言う。

「な、なんだ…っ」

震えながら、返事をしなければまずいと本能が警鐘を鳴らすままに口を開いていた。

「ち、返事しやがった…無視したら殴ろうと思ってたのに…」

ぼそりと言われた思いっきり不穏な台詞に、男が自分の本能に深く感謝したことは言うまでもない。

「お前、昨日脱獄した、囚人ナンバーG 925に間違いないな？」

ものすごく不満そうな顔で問われ、脂汗をかきながらも、男は必死に頷いた。

きちんと返事をしなければ、己の身が危ないことは身に染みてわかっていたのだ。

「——ってことでサイ。捕まえといたから回収班頼む」

少女が機械にそう言う。

『…やだ』

むくれたような声でそんな言葉が返された。

「じゃ、頼む…っではあ!？」

当然ながら了承が返ってくると思っていた少女は、正反対の応えに声を荒げる。

「何言つてんだ馬鹿！」

『……タマが馬鹿。私を置いて勝手に行つたくせに』
「誰がタマだと！？ 猫みたいに呼ぶな！！」

激昂する少女に返る言葉はそっけない。

『タマはタマ。それに、タマが猫の名前なんて決め付けるのは差別犬だつてカメだつてタマつて名前でもおかしくない』

「何でカメ！？ ……いや、んなことは今はどーでもいい！ 早く仕事しろ！」

『やだ』

「やだじゃねえ！ お前プロの自覚あんのか！ 仕事しなかったらユートに怒られるだけだからな！？」

『……そしたらタマのせいにするから大丈夫』

「ふっざけんな！ 何が大丈夫だばけ、早くしろ！」

怒りの形相で機械に向けて怒鳴るように少女が叫ぶ、が。

「——タマが置いてつたの謝るならちゃんとする」

「お前な、わがままも——」

ぴた、と少女は動きを止めた。

……今、機械の向こうからではなく、直に耳に声が届かなかったか？

「——タマの馬鹿阿呆極悪人」

「……っ！」

振り向いた先には、一人の人間が立っていた。

短い金茶色の髪、同色の瞳は切れ長で感情を持たない。

細面の容貌には、性別を超越した美しさがある。

男にも女にも見えるその人物は、紺色の長いコートに身を包んでおり、服装からも性の判断がつけにくかった。

耳にあてた機械を握る長く細い指を持つ右手とは別に、左手はコートのポケットに無造作に突っ込まれている。

「おまつ…なんで！」

少女が驚愕に目を見開くと、相手の、精巧な人形のように美しく、表情のまるでなかった顔に、ほんの少しぶすくれたような色が浮かんだ。

「勝手に置いていくから追いつけてきたんだ、タマの間抜け冷血漢」

機械を右手ごとポケットに収めた相手に言われ、少女はがしごと頭を掻いた。

「だーっ、この馬鹿！何の為に俺がお前を置いてきたと思ってんだ！
…いや、それ以前にお前、俺を一体何だと思ってる！？」

「…タマ？」

「お前泣かすぞー！！」

「…それ、無理。私の方がタマより強い」

「こいつは…っ」

あまりの憎たらしさにぎりぎりとお歯を噛み締め、つい相手の首に手をかけそうになったが、少女は必死で自分を押さえ込んだ。

……落ち着け、落ち着けと自身を宥めて。

「…サイ。お前な、一応女なんだぞ？」

「…だから？」

身を落ち着かせようと息を吐きながら少女が言った言葉に、金茶の美形——会話からすると女であるらしい——は首を傾げた。

それに、少女は機械のスイッチを切ってナイフに収納しながらため息をついて言う。

「女の方が確実にこういう地域は危険だし、お前がいくら強くても、万が一ってこともあるだろ。だから、今回の仕事がここに潜伏してる脱獄犯を捕まえることって聞いてから、お前には現場に行く代わりにサポートを頼むって言ったのに…」

「男女差別。…私よりタマの方が可愛いから危ない。…万が一もないから、大丈夫」

「可愛いって言うな！——そーやってどうしても着いてきそうに見えたから、わざわざ夜中に抜け出したっつーのに…あーもう、わかったよ、わーかーりーまーしーたー。俺が悪かったです、すいませんー」

少女がどこぞの不良のごとく、身近に居た男を一人踏みながら謝ると、金茶髪はわずかに口の端を上げた。

「…ん。よし。…じゃ、連絡する…」

いそいそと機械を再び取り出し、連絡を始める金茶髪。

……少女に踏まれて悲鳴を上げる男は、全く気にもされていなかった。

「任務完了。回収班は——」

「やれやれ…」

機械に、事務的に淡々と話し掛ける金茶髪を見て、少女は肩を落とす。

なんだかとても、疲労感がした。

心配しただけ損だった。

こうなるともう己が馬鹿らしく思えると、少女は脱力する。

——まさかそこへ、命知らずな台詞が聞こえるなどと思わずに。

「ちくしょう…なんで俺が、こんなひよろい女に…！」

男達の一人が呻くように漏らした声だった。

愚かなその仲間に、這いずりながらも、脱獄犯の男を見捨てて自分だけは逃げようとしていた他の二、三人が、憤慨したような、それでいて絶望的な声を上げた。

——その男が一番物分かりが悪く、他の輩の方が弱者と強者の区別が付いたらしい。

何はともあれ、たった今発言した男は——地雷を踏んだのだ。

——ゴキリ。

「ぎ…！」

地についていた手の甲を、物凄い力で踏まれた男は、手の骨が折れて、その痛みにならな悲鳴をあげる。

男の手をぐりぐりと踏み潰しながら、『少女』は、地獄の使者のように恐ろしく低い声で囁いた。

「…今、なんつった？」

「ぎゃああ…！！いい、痛え、痛え！た…助け、」

バキツと、殴打の音が響く。

ブーツの爪先で頬を蹴り付けられた男は、脳が揺さぶられた感覚と痛みで一瞬意識が飛んだ。

「…寝てんじゃねーよ」

ごり、と固い大地に頭をこすりつけられて意識が戻ってくる。

『少女』は、戦慄を招く笑みを浮かべていた。

「お前なんつったよ。…俺が女だつて言つたよな、お・ん・なだつて？」

確認しながら、剣の先を男の手の平に食い込ませる。男は絶叫した。

「まだはつきりとそう口にしないでいたなら、見逃してやったのに——言いやがったな？俺はなあ…俺は、れっきとした、男なんだよ！——」

ばさり、と服が宙を舞う。

白いワンピースのスカートは、空気を孕んで膨らみながら、地面に落ちた。

髪の毛を手早く紐で結わえる。

脱ぎ捨てた下には、黒いシャツ。

黒いズボンと揃えて、明らかに男物の服だ。

先程までの愛らしい「少女」は消え、その場に、見かけに反し残忍な光を目に宿した一人の「少年」が顕現した。

「——はいそこ、逃げるな？」

何とか逃亡を謀ろうとしていた残りの男達は、その声にぎくりと停

止した。

「…なあ、お前らも、俺のこと女だと思っただろ？」

静かな問い掛けに、怯えきった男達は必死に首を横に振ったが、無意味だった。

艶然とした笑みが少年の顔に刻まれる。

——目が、完全に据わっていた。

「…決定。せいぜい喚け」

すう、と真横に上げた少年の右腕に、蛇のように炎が纏い付く。その炎は美しかった。

赤でもあり橙でもあり、僅かに青白さを宿した焰は、それ自体に意思があるかのように蠢いている。

「公開処刑だ」

愉しげに笑う少年は、怒りながらも笑顔なだけにとてつもなく恐ろしい。

炎が揺らめき——

「『燃やせ』」

——紅蓮の火が舞った。

「ぎゃあああっ！」

「火が、火がああ！！！」

発火したのは男達の衣服。

ごう、と勢いよく赤く燃え上がり、あっという間に火は人体にまで触手をのばそうとしていた。

しかし、その間の僅かな時間に、

「——水縛」

小さな、凜とした声。

その呟きと共に、水瓶を引っ繰り返したような大量の液体が——ざばりと辺りに降り掛かった。

恐怖にのたうち回っていた男達は、丸焦げにならなかったことを信じてもない神に感謝しながら、何故己が助かったのか理解出来ない内に、皆意識を失っていた。

「——タマ、やりすぎ」

一枚の紙片を細い指に挟んだまま、金茶髪は非難の声を上げる。少年は内心舌打ちしながら肩を怒らせた。

「……そいつらが禁句を言うからだ」

「……しょうがない。タマ、可愛いし」

「可愛い言っな！　つかタマも言っな！！」

「……タマ」

「……てめえ、いい度胸してんじゃねえか、ああん？」

襟首を掴んでがつくんがつくん揺さ振られても表情を変えず、相手は、いつの間にかさらりと灰と化した紙を離れた指で、後ろを指差す。

「あ？」

振り向いた先に、幾人かの黒服に身を包んだ者達がやってくるのが見えた。皆武装している。護送班だ。

「…何だ、やっと来たのか」

その夜の終焉に、恐怖で縮こまっている男達は異常な程素直に護送車に乗せられていった。

男達にしてみれば、少しでも早く最悪の悪夢から——言うまでもなく少年のことだ——逃れることができるならば、何でもよかったのだろう。

夜が、終わりに近づいていく。そうして彼らの任務は終わった。

楽園とは名ばかりの、エデンの園は檻に近い。

——そこは、罪の巣窟に取って代わられたのだから。

シンズネスト、と呼ばれる都市がある。

そこは遙か昔、人々が辿り着いた時には緑が生い茂り、食物に満ちあふれ、皆飢えることもない聖地だったという。

嘘か真か、それはわからない。

今はもう、エデンと名付けられていた土地の面影は欠片もなく、そこはあらゆる欲望が渦巻いているだけだった。

——シンズネスト、第五一般居住区。

その地には、ある特殊なひとつの組織が根を下ろしていた。

プレス・オブ・エンジェルズ——通称BOANと呼ばれるその組織は、所謂『万屋』を大きくした存在だ。

少女の格好をして、男達をしめあげた、愛らしい顔立ちの少年の名前は、かざみね たまき風峰珠貴。

そして性別認識不可能な無表情少女の名は、みゆいつき深遊斎といった。彼らはパートナーで、共にBOANに所属する者なのである。

基本的にどこからか依頼が舞い込めると、報酬と引き換えに、BOANはその依頼に応じて誰かを派遣する。

今回の仕事は脱獄犯を捕まえることだったのだが――結局、男は獄中にいるよりも恐ろしい目に合わされて、他の男達共々牢屋に再びぶちこまれた。

あの地区にいる輩は大抵が犯罪者である為に、共に居た男達も尋問され、ぼろぼろと罪がこぼれてきたことで、御用となったのである。渦中の珠貴はというと、やりすぎだと上司から小言を言われ、未だに置いていったことを少し根に持っている斎にいじられながら過越し……拗ねていた。

「俺が何したっつーんだよ……」

「……タマ」

ぽん、と珠貴の肩に手を置く斎。
機嫌を直して珠貴を慰めようとしてるのかと思いきや、

「……こないだの写真、出来た。可愛く撮れてる」

そう言って見せてきたのは、件の任務の、珠貴の女装写真であった。

「てめえ！ いつの間に!？」

奪い取ろうとすると、斎はすいと避ける。

幾度か攻防戦を繰り広げた後、斎は表情こそ出ないものの、楽しげに言った。

「……タマ。今度の任務は、喫茶店のウェイトレスをやれって。私はウェ이터」

「何でだよ！ 逆だろうが!！」

「…その方が似合うから」

「ぜっつってえ嫌だばけー！！　つーかタマって呼ぶなー！！」

珠貴の怒りの絶叫が、響き渡った。

そんなこんなで、彼らは今日も元気である。

墮天使の箱庭（後書き）

これもまたHPから。大分前に書いたものなので文章が崩れており
まずがお気になさらず。

実は近未来的な話だったり。でもあんまり科学的なことは出てき
ません。

女の子みtainな外見が悩みの少年と無表情美形がデフォルトながら
中身は相方ラブな少女の話。結構お気に入りのキャラクターです。

……私外見と中身が一致しない人物が好きすぎる。

けものとりつぶ！？（転生トリップ）

——世界を断ち切られた感覚というのは、ひどく不可解なものだった。

例えばそれが薄氷の上に築かれた偽りの幻想だったとしても、日本と言う国では「平和」という言葉が蔓延していた。

時折ニュースで目にするだけで、眉を顰めるようなそんな出来事が、自らの身に降りかかるだなんて——爪の先ほども思っていなかったのだ。

たった、一瞬だ。

命が終わるのは。

何故その白刃は、ぶすりと私の心臓を突き刺したのか。どうも素人のようにしか思えない相手だったので、一突きで死を迎えたのは、恐らく非常に確率の低い、明らかなる偶然だったのだろう。

画面が真っ暗になるような、意識の喪失。ぶつんと音を立てたような人生の強制終了に、何かを思うまでもなく死んだ——はずだった。

気が付けば、もこもこふさふさとした、淡い白色の毛並みが見えた。何かの動物の前足だ。ぷにとした桃色の肉球と、真珠のように輝く小さな爪も見える。

間違いなく猫科の生き物だ、触ってみたい！ と、思わず手を伸ばしたつもりが……何故か、手が遠のいた。

あれ？ と首を傾げ、再び手を伸ばすが、やはり届かない。

頭の中で疑問符が踊りながら、同じことを数回繰り返して漸く——驚愕の事実が気付いた。

前々から、鈍臭いと友人知人に罵られてきたが、ここまで自分が鈍いとは思っていなかった。

手を伸ばせば目の前の前足が逃げていくのは当然だ。

……その前足の付け根は、己の方にあるのだから。

つまり、それは自分自身の持ち物だった。

後に母親は、私が一人遊びをしていたと嬉々として父親に語ったそうなのだが――。

手を動かして目の前にやってみれば、なんとも簡単に、逃げていた動物の前足は傍に来た。

反対の手で触れてみても、ふわふわする気はするのだが、以前のようには、小さな子猫を見つけて触ってはしゃいでいたような気分にはならない。まあ、自分自身の手や毛に触れて歓喜していたことなどないので、自分のものと他のものに触れるのは感覚が違うということだろう。

これはおそらく、生まれ変わりと云うやつだろう。

人間としての死を迎え、猫に生まれ変わったのか、なんて思っていたのだが……。

よく考えれば、今生の父母は金と銀の毛並みの美しい美猫だと思いついていたが、猫としては結構な大きさだったし、顔立ちもどこか違うし、おまけに、あまり覗くことがなかったので気付かなかったが、背中には、鳥のような形の、小さな翼があった。

それらに気付かず、完全に猫だと思い込んで、親に甘えるがまま、のんびりまったりと過ごしていた為に――偶々水面に写った己の容貌を初めて認識した時は、茫然として魂が抜けたような状態になってしまった。

雪のような色をした、ふわふわの毛並み。大きなアーモンド形の目は、左右で色違いの琥珀と橙色の虹彩の中で縦長な黒い瞳孔が目立つ。小さな足に生えた真珠色の爪。ぷにっとした桃色の肉球に、ふさとした尻尾。体毛の割に尻尾の毛だけは犬のようにふっさりとしているので、一部だけ毛の長い猫かとばかり思っていたけれど……首を後ろに回して――猫はかなり首が回る生き物である――背中を見てみれば、小さな小さな真白き翼がちょこんと存在した挙句、太陽と月のような不思議な紋様が背中に描かれていた。

はつきりいつて、外見だけ見れば、物凄く愛らしい子猫に見えるが、顔立ちがやっぱりどこか猫とは違う。虎に近いものもあるが、あれほど凜々しさを持ち合わせているわけでもなく。

生後数カ月になった所で、父母に色々なことを教わったが、自分は一般に『聖獣』と呼ばれる種族であるらしい。

日本にいた頃は、平々凡々の社会人だった。性別は一緒なれど、種族が明らかに違っていている——まさか、猫ですらなく、地球では存在しないような生き物とは。

聖獣の成長は遅い。生まれた時は生後二カ月程の子猫の大きさ位で、一年が経つても、あまり大きさは変わらなかった。

ただ、聖獣は一年経ったら巣立つのが普通。

恐らく猫科の生き物に近いように思えるのに、生殖能力はやや低め、一生の内出産回数は平均でも一度か二度のようで、母は初産。一度の出産で基本的に一、二匹しか生まれない種なので、私は一人っ子だった。中々愛情は注いでもらったが、一歳になったら親元から巣立たなければならぬ。

生まれた土地、美しい様々な色彩を湛えた緑豊かな森から離れねばならなかったことはとても寂しかったし、父母も別れを惜しんでくれたが、独り立ちせねばと、私は巣立った。

森の中を歩き、自然の彩に見惚れながら足を運んでいた時、ふと思っ

た。猫はあまり色彩を認識できないと聞いたことがある。にも関わらず、人間だった時のように、世界が鮮やかに見えることも、考えてみれば自分が猫ではないという証拠の一つだったのではと。——まあしかし、なかなか気付きづらいことだよなと、自分で自分を慰めた。断じて鈍いせいではないと思いたい。断じて！

聖獣は名の如く、『聖なる獣』である。広く存在は知られているらしいが、人間の前に顔を出すことはあまりない。

ここは地球とは違う世界だ。それは自分が猫ではないと知った時に気付いたことだが、この世界には、ファンタジーやお伽噺で登場す

るような生き物が多数存在する。その中に自分自身も含まれるのだが――世界には、たくさんの精霊と呼ばれる種族がいた。目には見えないが、自然と共に在るといふ世界を形作る要因のひとつである彼らは、時に他種族にその力を貸してくれる。

他種族が精霊の力を借りて為すもののことを魔法と呼ぶが、人間に対して精霊が力を貸すことは滅多になく、その反対に、神の眷属と謳われる聖獣は、大層彼らに好かれていて、生まれた時からその加護を与えられていた。

喉が乾けば水をくれるし、空腹になれば果物が飛んでくる、といった具合に、至れり尽くせりで甘やかされてきた。前世の記憶がなければひどく我がままで高飛車になっていたかもしれない。あるいは、とんでもなく箱入りのお嬢様になっていただろう。……いや、世間知らずではあるのだけれど。

精霊ってなんでこんなに優しいんだろう、と母に零した所、元から精霊は友好的だが、私に対する過保護さは異常だと言われたことがある。好かれているのは嬉しいが、何故そこまで、というのは未だに疑問である。

希少な種族である聖獣は、狼のように、生涯ただ一匹の相手としか番わない。

それと同じように、時折人の中に好ましい相手を見つけた場合、稀にだが、生涯でただ一人とだけ、主従の契約を結ぶことがあるという。

気楽に世界をのほほんと見て回りながら、もし良い人や良い番に巡り逢えれば行幸だなー、なんて思っていた所。

早々にして、あることを切欠に、私は唯一のひとを見つけてしまうのだった。

「どうしました？」

じいっと見上げれば、優しい手が頭や背中を撫でてくれる。特に喉

を撫られるのは気持ちよくて、ごろごろと鳴った。

短く、ふんわりとした癖っ毛の黒髪も、灯火を含んだような柔らかな黄金と夕暮れ刻の胸を打たれるような紅の瞳も、包み込むようにあたたかな雰囲気も、全て好ましい。

『なんでもない』

聖獣は、人間のような声帯がないので、一種のテレパシーのようなもので人と会話する。

主となったひとに擦り寄りながら、私って面食いだっただなと、神々しいまでに整ったその顔に見惚れていた。

その時の私は知らなかった。

聖獣は成長すれば人の形を取ること出来、中には人を伴侶とした者もいたことを。

自分の主への思いが、主人への敬愛とはまた違う感情を含んでいたことも――。

子どもの頃はまだ、何も知らなかった。

けものとりっぷ！？（転生トリップ）（後書き）

現代から異世界トリップ、しかも人外がいいなーと思った所、猫っぽい生き物に。

説明とか多くなってしまったけど、これはこれでいい気がします。書こうと思えば、これも長編に出来なくもなさそう。暫くは無理だけど。

気分転換に書きました。よろしければ感想などお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8591j/>

短編小説集。

2011年1月16日17時28分発行